ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第 7 号

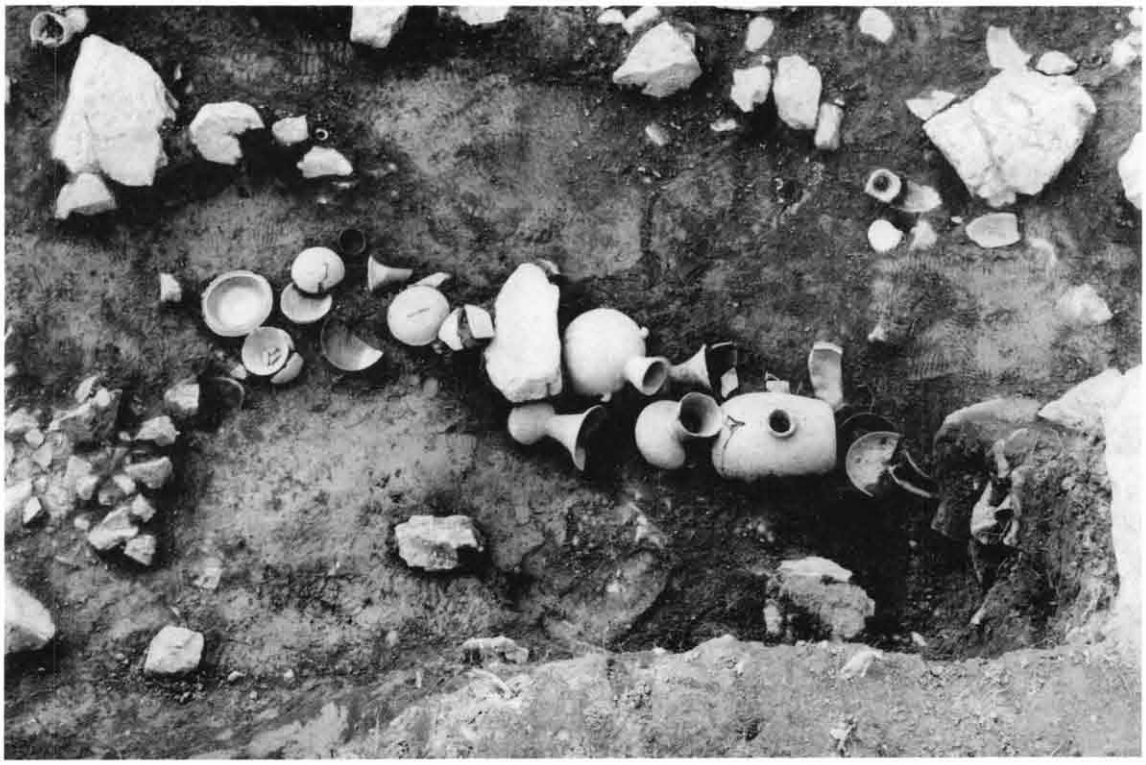
篠窯跡群出土の須恵器について……石井　清司……1
和久寺跡第1次発掘調査……大槻　真純……16
古代エジプト跡遺を訪ねて（4）……小山　雅人……23
—昭和57年度発掘調査略報—……27
16. 洞楽寺古墳　18. 長岡京跡右京第105次
17. 後正寺古墓・小屋ケ谷古墳　19. 伏見城跡
府下遺跡紹介　9. 大里環濠集落……36
長岡京跡調査だより……38
センターの動向……45
受贈図書一覧……47

1983年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版 1　　小屋ケ谷古墳

(1)　小屋ケ谷古墳石室（南から）



(2)　石室内遺物出土状況（東から）

図版 2　　舞塚古墳（長岡京跡右京第105次）

(1)　舞塚古墳前方部周濠（南から）

(2)　人物埴輪出土状況

篠窯跡群出土の須恵器について

石　井　清　司

1. はじめに

篠窯跡群は亀岡盆地東南部，亀岡市篠町に所在し，東西 2.4 km の丘陵部に百数十基の窯を数える一大須恵器窯跡群である。

篠窯跡群の発掘調査は国道９号線バイパスに伴う発掘調査として昭和52年度より開始され，これまで石原畑１・２・３号窯(注1)，西長尾奥１号窯，西長尾１・３・４・５・６号窯(注2)，芦原１号窯(注3)，小柳１・４号窯(注4)，黒岩１号窯(注5)，前山１・２・３号窯(注6)の総計16基の調査を行った。これら窯跡はいずれも須恵器及び緑釉陶器を生産しており，奈良時代後期より平安時代中後期に至る約300年の間連綿と続く窯跡群である。篠窯跡群での各窯出土遺物，特に前山２・３号窯，黒岩１号窯出土の緑釉陶器については，各消費地で出土例が知られ，平城京，平安京のほか石川県(注7)までの広範囲に広がることが指摘され，注目されている。篠窯跡群の検出窯について，堤圭三郎・安藤信策・水谷寿克(注8)の各氏により考察されているが，全体を通じ，各窯出土遺物の検討について論述されたものがなく，須恵器の編年作業が切望されていた。しかし，１基の窯体及び灰原内出土遺物がコンテナーバット 50～200 箱と莫大な量にのぼり，また，数基の窯が隣接するため，灰原内に時代を異にする遺物が混入しており，整理作業は困難をきわめ，各窯の器種構成，法量変化など，明らかにし得なかった。

各窯出土遺物の器種は，杯・椀・皿・蓋・鉢・盤・壺・風字硯・円面硯など多種にわたり，大きくは，奈良時代的様相をもつ石原畑３号窯・西長尾奥１号窯・西長尾１・４号窯，平安時代の様相をもつ芦原１号窯・西長尾３・５・６号窯・小柳１・４号窯・黒岩１号窯，前山１・２・３号窯に分かれる。

各窯出土遺物の詳細な器種構成，法量変化については，今後の報告書に譲り，今回は各窯出土遺物の主体である杯・皿・蓋・椀・壺・鉢の形態変化及び，器種の消長変化を中心に今後の編年作業における見通しを論述していきたい。

2. 各窯出土遺物の概要

石原畑３号窯(第１図１～21)　石原畑３号窯は篠窯跡群の東端に位置する半地下式窖(あな)窯である。出土遺物はコンテナーバット100箱を数え，これまでの16基の窯の内，西長尾奥１号窯とともに最も古い様相の土器が出土した窯である。

出土遺物には杯Ａ（１～３）・杯Ｂ（４～７）・皿Ａ（11・12）・皿Ｂ（15～17・19）・蓋

A（8～10・18）・蓋B（13・14）・短頸壺（21）・短頸壺蓋（20）がある。杯は底部に高台をもたない杯A（1～3）と高台をもつ杯B（4～7）に大別でき，杯A・Bとも口径12～15 cm のものが主体をなす。杯Bは，皿Bとともに底部外縁より内側に踏んばった高台を貼り付ける。皿は杯と同様に高台の有無により皿A（11・12）・皿B（15～17・19）と大別でき，皿A・Bとも土師器の器形を模したように口縁端部内側に1条の明瞭な沈線をめぐらす。皿Aは口径14～18 cm，器高 2 cm 前後，皿Bは口径 15～20 cm，器高 3 cm 前後の小型品が主体をなすが，口径29 cm，器高5.6 cmを測る皿B（19）があり，これとセットをなす蓋A（18）も出土している。蓋は宝珠形つまみをもつ蓋A（8～10）と輪状のつまみをもつ蓋B（13・14）があり，蓋Aは口径 14～15 cm と 16～20 cm に分かれ，蓋Bは口径 18～20 cm を測る。蓋A・Bとも縁端部はいずれも丸みをもって内側に折り返す。

西長尾1号窯（第1図22～40）　西長尾1号窯は篠窯跡群の中央に位置する半地下式窖窯である。1号窯の南 1.4 m に相前後して操業されたと思われる西長尾4号窯がある。

出土遺物には杯A（22・23）・杯B（24・25・29・30）・皿A（32・33）・皿B（34）・蓋A（26～28・31）・壺Aa（36・37）・鉢A（38）・盤（39）・平瓶（40）・円面硯（35）があり，コンテナーバット約70箱を数える。

杯A・Bは口径 11～14 cm の小型品が主体を占め，杯A・Bの個体数の割合は1：3と杯Bが杯Aを上まわる。杯B（24・25・29・30）の高台は，ほぼ底部外縁に接して長方形の高台を貼り付ける。皿A（32・33）は口径 13～18 cm が主体をなし，石原畑3号窯にみられる口縁端部内側の沈線は皆無である。皿B（34）は総個体数8000点の内1点と，消滅化傾向がみられる。蓋はいずれも天井部に宝珠形つまみを付す蓋A（26～28・31）であり，口径 13～17 cm が主体を占め，口径30 cmを測る大型品は皆無となる。壺は体部最大径が中位よりやや上方にあり，倒卵形の体部より口縁部は直立ぎみに立ちあがったので，口縁端部は外方に広く屈曲する。底部は縁端部より踏んばった形の高台を貼り付ける壺Aa（36・37）である。鉢A（38）は口径 26.0 cm，器高 19.4 cm を測り，扁平な底部より口縁が短く外反し，底部は貼り付けによる高い高台を付す。盤（39）は口径 27.4 cm，器高11.0 cm を測り，平底の底部より直線的に口縁部へ続き，口縁端部は内側にわずかにつまみあげる。鉢A，盤とも完形に復元し得る資料は少ない。

西長尾1号窯と同時期資料として西長尾4号窯，芦原1号窯がある。

石原畑2号窯（第2図56～69）　石原畑2号窯は前述の石原畑3号窯の丘陵低位にあり，2号窯北2 mに隣接して石原畑1号窯がある。

出土遺物には杯A（56・57）・杯B（58・62・64・65）・蓋C（59～61・63）・壺Ab（66）・壺B（67）・鉢Ab（68）・盤（69）がある。

杯A（56・57）は底部より丸みをもって屈曲し口縁部へ続き，底部外縁に接して低い高台を貼り付ける。杯Bは口径 11～14 cm，器高 4.5 cm のもの（58・62・64）と口径 16cm，器高 5.4 cm のもの（65）がある。蓋はいずれも天井部のつまみが消え，縁端部が鈍角で屈曲する蓋C（59・60・61・63）となり，口径12～15 cmが主体である。壺Aは体部最大径が上部にあり，肩部を形成し，底部はいずれも回転糸切りによる壺Ａｂ（66）に変化する。鉢Aは西長尾１号窯同様なで肩の体部より短く直立する口縁部へ続き，口縁端部はわずかに内側につまみあげ，底部はいずれも回転糸切りによる鉢Ａｂ（68）である。鉢Ａｂは口径 20.0 cm，器高 13.8 cm と西長尾１号窯出土鉢Aに比し，小型長胴化傾向がみられる。盤（69）は口径 30.0 cm，器高 10.8 cm を測り，口縁端部は内側にわずかにつまみあげ，底部はいずれも回転糸切りによる。

石原畑２号窯と相前後する資料として石原畑１号窯，芦原１号窯，前山１号窯がある。

小柳１号窯（第１図41～55）　小柳１号窯は既に報告がなされ，器種構成，法量が明示されている。杯A（41・42）・杯B（43・47・49）は石原畑２号窯に近似し，杯Bは直線的に外反する口縁部で，底部には外縁部に接して低い高台を貼り付ける。蓋は宝珠形つまみを付す蓋A（44・48）ともたない蓋C（45・46）があり，その割合は 7：1 と蓋Aが蓋Cを上まわる。蓋Aは，大（口径 8～12 cm，器高 2.0～2.3 cm），中（口径 5～6 cm，器高 1.5cm），小（口径 3～4 cm，器高 0.5～0.6 cm）に大別され，大型壺Aは高台を貼り付ける壺Ａａ（52），小型壺Aは回転糸切りをとどめる壺Ａｂ（51）であり，西長尾１号窯と石原畑２号窯の中間的様相をとどめる。鉢Ａｂ(55)・盤（54）は石原畑２号窯に近似する。

西長尾３号窯（第２図70～80）　西長尾３号窯は西長尾１・４号窯の北 25 m に隣接する半地下式窖窯である。

出土遺物には杯A（70・71）・杯B（73・74）・皿C（72）・椀A(75・76)・壺Ａｂ（77・78）・鉢B（79・80）がある。

杯A（70・71）は底部より内湾ぎみに立ちあがる口縁部に続き，口径15.0 cmに対し器高 2.5～3.0 cm と石原畑３号窯に比し浅くなる。杯B (73・74) は石原畑２号窯同様底部外縁部に低い高台を貼り付け，口縁端部は内湾ぎみとなる。杯Bは，口径13.5～14.0cm，器高 5.0 cm を測る。杯A・Bの比率は杯A1200に対し杯B20と，杯Bが激減する。杯Bの激減に伴い，蓋５個体と消滅化傾向がみられる。

新たな器形として椀A（75・76）がある。椀Aは平底の厚い底部より内湾ぎみに立ちあがる口縁部へ続き，外底面に回転糸切り痕を明瞭にとどめる。壺Ａｂ（77・78）はなで肩の体部より広口の口縁部へ続き，底部は平底でいずれも回転糸切り痕をとどめる。鉢は平底の底部より外反する口縁部へ続き，口縁端部は内側に強くつまみあげ，「く」の字形口

縁をなす鉢C（79・80）がある。

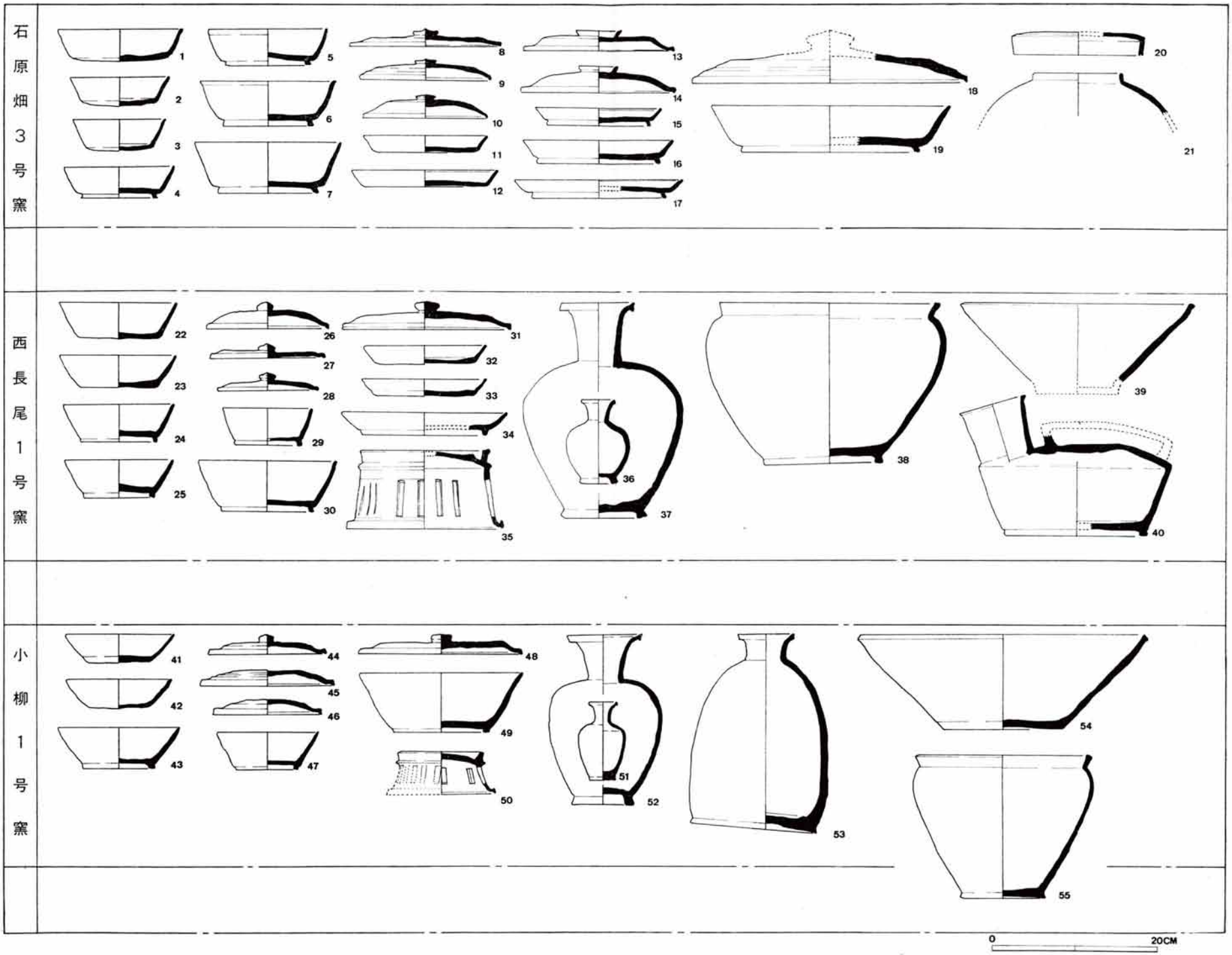
前山2・3号窯（第2図81～93）　前山2・3号窯は須恵器とともに緑釉陶器（総個体数の8％）を含む。前山2・3号窯出土遺物には皿D（81～83）・椀A（86・87）・椀B（84・85・88）・椀C（89）・鉢C（93）・酒杯（90・91）・耳杯（92）があり，椀が総個体数の75％と主体を占め，杯A・Bの消滅化傾向がみられる。椀は形態が多種にわたり，西長尾3号窯から続く，平底の厚い底部より内湾ぎみに立ちあがる口縁部をもつ椀A（86・87）とともに，新たな器形として口縁部中央で屈曲し腰部をなす椀B（84・85・88），底部を回転糸切りののちわずかに削り出した低い高台を形成する椀C（89）がある。また，酒杯（90・91），耳杯（92）などもある。皿は厚い底部よりわずかに屈曲し，明瞭な口縁部を形成する皿D（81～83）とともに，蛇ノ目高台による皿Dがある。鉢は口縁部を内外方に肥厚させ玉縁状になる鉢C（93）へ変化する。

黒岩1号窯（第2図94～107）　黒岩1号窯は前山2・3号窯同様，緑釉生産のための2次焼成窯として広く知られるが，総個体数の内，10％が緑釉陶器であり，その多くが須恵器である。黒岩1号窯出土須恵器には前山2・3号窯同様，杯A（99）・皿D（94・95・96）・椀A（100・101）・椀B（97・98・102）・椀C（103）・壺Ab（105）・鉢C（107）・酒杯（104）・耳杯（106）がある。椀は前山2・3号窯同様，椀A（100・101）・椀B（97・98・102）・椀C（103）があり，前山2・3号窯と比較すると全体に口縁部の屈曲，高台の削り出しに粗雑さがみられる。組成変化では前山2・3号窯出土椀Bが70％に対し，黒岩1号窯60％，反対に椀Aは，前山2・3号窯0.2％に対し，黒岩1号窯15％と椀Aの増加がみられる。鉢C（107）は前山2・3号窯出土鉢C（93）が肩部で内湾する明瞭な屈曲部があるのに対し，黒岩1号窯出土鉢Cは底部よりそのまま口縁部へ直線的に続き，口縁端部でわずかに内側に屈曲する玉縁状口縁となる。

西長尾5号窯（第2図108～116）　西長尾5号窯はロストル（火格子）型式による二重床面という特異な窯体構造を呈し注目されたが，出土遺物には杯A（108・109）・椀A（110・111）・椀C（112）・壺Ab（113・114）・鉢C（115・116）がある。椀A（110・111）は前山2・3号窯，黒岩1号窯より続く形態であり，西長尾3号窯から西長尾5号窯へと口径が短くなるのに対し，器高は高くなり，法量が深くなる傾向がある。なお，前山2・3号窯，黒岩1号窯で主体をなす椀Bは消滅する。鉢Cは黒岩1号窯同様に，口縁部は肩部をもたず，底部より内湾ぎみに立ちあがり，玉縁状口縁となる。

3. 土器の器種消長の変化

以上，篠窯跡群の発掘調査で確認された16基の窯のうち，代表的窯出土遺物の特徴を簡



第1図　篠窯跡群出土須恵器編年試案 (1)

第2図　篠窯跡群出土須恵器編年試案 (2)

単に羅列した。前述のように篠窯跡群は8世紀後半より11世紀に至る窯跡群であり，各窯出土の杯・埦・皿・蓋・壺・鉢に形態及び器種の消長変化があり，篠窯跡群内での須恵器編年作業が可能であると考えられる。ただ，100基以上の窯跡群の内，16例の調査のみであり，今後，新たな知見が出ると考えられるが，現時点における整理作業の目安として編年作業を試みたい。

石原畑3号窯はこれまでの調査の内，最も古い様相の土器が出土した窯である。杯B・皿Bとも高台が高く，口縁部との屈曲部より内側に高台を貼り付け，皿A・皿Bはいずれも口縁端部内側に1条の明瞭な沈線をめぐらす。蓋は高い宝珠形つまみを貼り付けた蓋Aと，輪状のつまみをつけた蓋Bがあり，蓋A・Bとも口縁部はいずれも丸みをもって内側に屈曲し，小柳1号窯，石原畑2号窯にみられる蓋Cとは，口縁部の形態が異なる。石原畑3号窯では西長尾奥1号窯同様，口径30 cm前後を測る大型皿B，大型蓋Aがあり，高台の形態とともに西長尾1号窯に先行するものと思われる。

西長尾1号窯は石原畑3号窯と器種構成は類似するが，杯A・杯B，皿A，蓋Aとも全体に小型化傾向がみられる。杯A・杯Bの比率は石原畑3号窯では3：2に対し，西長尾1号窯は1：3と杯Aの減少化がみられ，また，皿A・皿Bの比率は石原畑3号窯がほぼ同個体数に対し，西長尾1号窯は皿Aが404個体に対し，皿B1個体と激減する。また，口径30 cm前後を測る大型皿B，大型蓋Aは消滅する。壺Aの高台は貼り付け高台が主体であるが，器高10 cm前後の小型壺Aに数点糸切り痕をとどめる壺Abがある。

石原畑2号窯では杯Bの高台が底部と口縁部の屈曲部にわずかに貼り付けたものに変化し，口径 11～14 cm のものが主体を占める。また，杯Aは杯Bに比し出土量が激減する。皿はA・Bとも消滅化傾向がみられる。蓋は天井部につまみをもつものが皆無となり，口縁端部が直線的に外方に広がる。壺Aは大小とも回転糸切り痕による平底となり，肩部の張りが西長尾1号窯に比し，さらに強くなる。体部と口縁部の接合方法は西長尾1号窯が2段成形に対し，石原畑2号窯では1段成形となる。鉢Aは口径，器高とも西長尾1号窯に比し小型長胴化傾向がみられ，口縁部の立ちあがりも短く，端部が外方に肥厚ぎみにおわる。底部は西長尾1号窯が高台を貼り付けるのに対し，石原畑2号窯は平底で回転糸切り痕をとどめる。石原畑2号窯は，石原畑3号窯，西長尾1号窯にみられる奈良時代的様相が消え，杯Bの高台変化，皿A・皿B・蓋Aの消滅，壺・鉢・盤の回転糸切りによる平底より平安時代前中期的様相をみせる。なお，西長尾1号窯とは器種構成に変化が著しく，1～2型式の差異が認められる。

小柳1号窯では宝珠形つまみをもつ蓋A，底部と口縁部の屈曲が明瞭な皿A，高い高台を貼り付ける壺Aaに奈良時代的様相をとどめるが，杯A・B，宝珠形つまみをもたない

蓋C，口縁部が広く外反し腰部をもつ皿Cに平安時代的様相をもつものがあり，両時代の様相が混在する。このことより小柳1号窯は西長尾1号窯と石原畑2号窯を埋める資料と考えられる。なお小柳1号窯は，西長尾1号窯との間に1～2型式の差異が考えられる。

西長尾3号窯では蓋が消滅し，新たな器形として底部外面に回転糸切り痕をとどめる椀

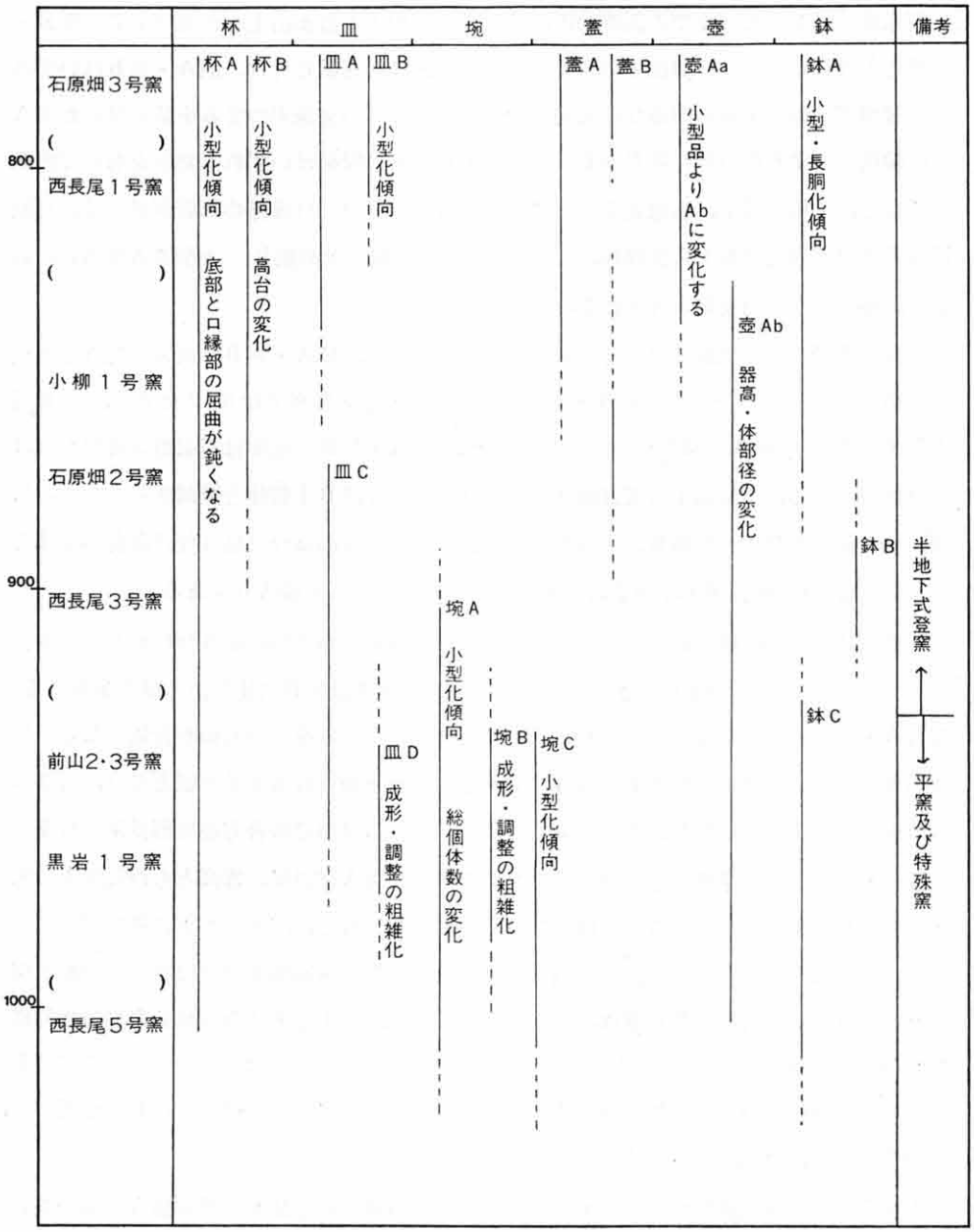


表1　篠窯跡群出土須恵器各器種の消長変化

A，平底の底部より外反する体部へ続き，口縁部が「く」の字形に屈曲する鉢Bがあらわれる。西長尾3号窯の特徴として各器種とも底部回転糸切り痕をとどめるのが多くなる。椀Aは西長尾3号窯以降，前山2・3号窯，黒岩1号窯，西長尾5号窯と続き，西長尾3号窯以降，口径の縮小化に対し，器高が高く，全体に溶量が深くなる傾向にある。西長尾3号窯では椀Aの個体数が総個体数の60%以上を占め，石原畑2号窯の主体であった杯Bが減少し，総個体数の10%に満たなくなる。

前山2・3号窯では，杯類の消滅化傾向がさらに強く，かわって西長尾3号窯より続く椀Aとともに，口縁部中位で屈曲し，底部が削り出し高台による椀Bがあらわれ，椀A・Bが総個体数の約75%を占める。また新たな器形として皿D・酒杯・耳杯・鉢Cがある。前山2・3号窯は，黒岩1号窯とともに緑釉陶器生産のための2次焼成窯と考えられ，緑釉陶器の器形である椀B・皿Dが激増すると考えられる。なお椀B・皿Dでは口縁端部にヘラの先端をあて，輪花状口縁をなすものがある。鉢Cは口縁部を肥厚させ，玉縁状を呈したもので西長尾3号窯出土鉢Bより変化したものと考えられる。西長尾3号窯から前山2・3号窯への変化が著しく，その間に2～3型式の差異が想定される。また，窯体構造の変化では，西長尾3号窯までは半地下式窖窯であるのに対し，前山2・3号窯，黒岩1号窯，小柳4号窯はいわゆる「三角窯」である平窯に変化する。

黒岩1号窯は，前山2・3号窯と同器種構成をなすが，椀Bが総個体数の約60%とわずかに減り，反対に椀Aが増加する。黒岩1号窯出土椀B・皿Dは，前山2・3号窯同様，削り出し高台によるが，底部と高台の屈曲が不明瞭となり，調整では，前山2・3号窯に比し口縁部内・外面及び内底面に粗雑なヘラミガキがみられる。前山2・3号窯出土の椀B，皿Dにみられた輪花状口縁が黒岩1号窯では椀Bの限定された器形(102)のみ施すようになる。鉢Cは前山2・3号窯では口縁端部で一段内側に屈曲し肩部をつくったのち，口縁端部を内・外方に肥厚させ玉縁状となるが，黒岩1号窯では肩部を形成しないものが多い。なお，前山2・3号窯と黒岩1号窯では器種構成にさほど変化を示さない。

西長尾5号窯では，前山2号窯，黒岩1号窯で主体となる椀Bが皆無となり，椀Aが総個体数の80%以上と主体を占める。椀Aはロクロ水挽き成形ののち，ナデを施すほか，ヘラミガキを加えず，成形調整の粗雑化，器形の単純化がみられる。鉢Dは黒岩1号窯同様，肩部をもたない玉縁状口縁であるが，黒岩1号窯が内・外方に肥厚する明瞭な玉縁状口縁に対し，西長尾5号窯では内あるいは外方の一方を肥厚させるものがみられ，口縁，器高とも縮小化傾向がみられる。なお，西長尾5号窯出土遺物中，底部回転糸切りによる椀A，鉢C，壺Aが総個体数の約90%を占める。

篠窯跡群におけるこれまでの調査結果より代表的遺物について器種の消長変化を一瞥し

たが，調整あるいは法量変化については今後の調査報告書に譲るとし，大きくは石原畑3号窯→(　　)→西長尾1号窯→(　　)→小柳1号窯→(　　)→石原畑2号窯→(　　)→西長尾3号窯→(　　)→前山2・3号窯→黒岩1号窯→(　　)→西長尾5号窯という変化が想定される。

4. 消費地からみた篠窯跡群の土器編年

篠窯跡群の調査成果により土器の形態変化・土器の消長変化を列記した。

これら土器の形態，消長変化については，西長尾3号窯までの半地下式窖窯，前山2号窯以降の平窯（三角窯，ロストル窯）へと窯体構造が変化し，窯体構造の変化につれ，その製品である土器も変化する。また，篠窯跡群は，一大消費地である平安京を中心に供給されたものと想定され，消費地の需要に応じて製品も変化すると考えられ，各窯を一律の時間幅で論じることに問題があると思われるが，ここではこれら諸問題を除外視し，各土器を一律と考え編年作業を進めた。なお，各窯は3～6回の操業回数が窯壁観察より窺えるが灰原内での層序による土器の差異は考えがたく，各窯灰原内出土遺物を一律に扱った。

ここで，篠窯跡群出土遺物に近似した消費地の資料を検討し，各窯の年代を想定したい。なお，平安時代以降，消費地での土器様相としては，土師器が主体を占め，次に須恵器，黒色土器，灰釉陶器，青白磁となり，須恵器の消費量は激減する。

平安京では出土土器の内，土師器，特に椀，皿類が主体を占め，土器の編年作業は，形態・法量・調整技法の差異により編年作業が進められている。平安京を中心とした一括資料内には，紀年銘を墨書した資料があり，絶対年代の一点がおさえられ，それを基準にして1世紀を3～4期に細分する編年作業が進められている。絶対年代が押さえられる資料として，平城宮では7期に分けた各標式遺構のほか，平城宮ＳＤ650Ａ(注9)，平安京右京二条二坊(注10)，同左京四条一坊があり(注11)，他に墨書書体，あるいは古銭より推定されるものとして，平安京左兵衛府ＳＤ01(注12)，同内膳町ＳＫ18(注13)がある。各一括資料内には篠窯跡群出土遺物に近似した資料を含むものがあり，それを軸として各窯の絶対年代の一点を想定することができる。石原畑3号窯出土遺物の内，杯Ａ・Ｂ，皿Ａ・Ｂは平城宮ＳＫ820（平城宮Ⅲ期．略年代の一点750年(注14)）に近似し，特に土師器の皿形態を模した須恵器皿Ａ・Ｂは口径・器高ともＳＫ820出土土師器に近似する。また平城宮以外の資料として，京都府木津町上津遺跡ＳＤ01（平城宮Ⅲ期相当資料）がある。上津遺跡ＳＤ01出土須恵器は石原畑3号窯に近似するが，高台の形態等細部について差異があり，石原畑3号窯が上津遺跡ＳＤ01に先行するものと思われる。西長尾1号窯に近似した資料として長岡京左京第13次(7ＡＮＥＳＨ地区）ＳＤ1301(注15)がある。同遺構には木簡のほか，多量の木製品・土器・瓦類・石製品が出

土しており，木簡の紀年銘より延暦6年（787)～延暦9年（790）に機能した溝であり，これより西長尾1号窯の年代が想定される。

黒岩1号窯に近似した資料として，平安京右京二条二坊遺跡ＳＸ１[注16]がある。右京二条二坊遺跡ＳＸ１は土師器，黒色土器のほか，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，青白磁などを含み，須恵器，緑釉陶器が黒岩1号窯出土遺物に近似する。同遺構には「天暦七」（953年）と墨書された緑釉陶器が出土しており，これより黒岩1号窯の絶対年代の1点が想定できる。

前山2・3号窯は土器形態，組成より黒岩1号窯に先行することは先述したが，両者には隔絶した形態，組成変化は考え難く，わずかに前山2・3号窯が黒岩1号窯に先行すると考えられる。前山2・3号窯出土椀Ａ，鉢Ｄに近似した資料として平城宮ＳＤ650Ｂ[注17]がある。ＳＤ650Ｂは天長5年（828），同7年（830）の紀年銘をもつ木簡が出土したＳＤ650Ａの埋没後，掘り開いた遺構であり，9世紀末～10世紀初頭と考えられている。但し，黒岩1号窯との比較より前山2・3号窯は10世紀第1～2四半期に下る可能性がある。

次に絶対年代を記す紀年銘を墨書した資料は欠くが，他の関連遺物より年代がおさえられる資料として石原畑2号窯がある。石原畑2号窯出土遺物に近似した消費地の資料として，平安京京都大学教養部ＡＤ22区梵鐘鋳造遺跡ＳＫ265[注18]がある。同遺構内には土師器黒色土器のほか須恵器があり，同遺構出土須恵器の内，杯Ａ（杯身12），壺Ａｂ（瓶14）は，石原畑2号窯に近似する。

同遺構は梵鐘鋳造遺構という特異な性格の遺構であり，土器のほか梵鐘の鋳型があり，同鋳型文様より平安京Ⅱ期古段階（10世紀初頭頃）と推定されている。但し，篠窯跡群の内，石原畑2号窯に続く窯として西長尾3号窯があり，西長尾1号窯が900年を前後する時期と考えられるため，これに先行する資料である石原畑2号窯は9世紀後半（9世紀第3～4四半期）と考えたい。

西長尾3号窯に近似した関連遺構は欠くが，土器形態より前山2・3号窯に先行することは先述した。これより西長尾3号窯は900年を前後する時期と考えられる。

西長尾5号窯は，雑器類である椀Ａ，壺Ａｂ，鉢Ｃと器種が限定され，黒岩1号窯とは1形式以上の差異があると考えられる。西長尾5号窯出土須恵器に近似した資料として，平城京薬師寺西僧房[注19]があり，11世紀前半と考えられる。

以上，消費地での一括資料より数点の類似資料という限定はあるが，篠窯跡群での各窯の時期を推定すると，石原畑3号窯は8世紀第3四半期，西長尾1号窯は9世紀第1四半期，石原畑2号窯は9世紀第4四半期，西長尾3号窯は10世紀第1四半期，前山2・3号窯は10世紀第2四半期，黒岩1号窯は10世紀第3四半期，西長尾5号窯は11世紀第1四半

期と考えられる。

5. おわりに

篠窯跡群は前述のように100基以上を数える平安時代における一大生産地であり，今後の調査状況により新たな知見，土器の編年作業の改正が必要と考えられるが，今後の調査の目安として，前述の須恵器編年作業を行った。篠窯跡群については出土須恵器のほか，黒岩1号窯，西長尾5号窯に代表される特異な窯体構造をもつものがあり，今後，10世紀を境とした半地下式窖窯から特殊窯への変化，また，文献に記載されない篠窯跡群の歴史的性格を検討する必要があると考えられる。窯体構造の変化については，機会を改め論述していきたい。

本文作製にあたっては，水谷寿克・伊野近富・波多野徹氏に負うところが多く，挿図には波多野徹・藤田順代・辻田典子氏をわずらわした。ここに記して謝意を述べたい。

（石井清司＝当センター調査課調査員）

注1　「篠・石原畑窯跡」（京埋セ現地説明会資料 №82-02）（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター（以下京埋文センター）1982.10.22

注2　石井清司「篠・西長尾窯跡発掘調査概要」（『京都府埋蔵文化財情報』第2号　京埋文センター）1981.12
石井清司「篠・西長尾5・6号窯発掘調査概要」（『京都府埋蔵文化財情報』第3号　京埋文センター）1982.3

注3　安藤信策・岡崎研一「芦原1・2号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会）1981

注4　安藤信策・水谷寿克・山口　博「篠小柳窯跡群の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-1)』京都府教育委員会）1980
安藤信策・水谷寿克「小柳4号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会）1981

注5　安藤信策「黒岩1号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1978)』京都府教育委員会）1978

注6　樋口隆久「前山1号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1978)』京都府教育委員会）1978
安藤信策「前山2・3号窯の発掘調査」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2)』京都府教育委員会）1981

注7　吉岡康暢氏の御教示による

注8　安藤信策・水谷寿克氏は各窯の発掘調査概報で詳細な検討を行っている
堤　圭三郎「亀岡市篠窯跡群」（『丹波史談』第112号　口丹波史談会）1982.3

注9　『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報第23冊）奈良国立文化財研究所1980

注10　平方幸雄・辻　裕司「右京二条二坊」（『平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所）1981

注11　田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告―左京四条一坊―』平安京調査会 1980

注12　平尾政幸「平安京左兵衛府」（『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978―Ⅱ）

注13　平良泰久・伊野近富ほか「平安京左京跡（内膳町）昭和54年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3)』京都府教育委員会）1980

注14　西　弘海・巽準一郎氏の御教示による

注15　山中　章・高橋美久二・百瀬正恒「長岡京跡左京第13次（7ＡＮＥＳＨ地区）発掘調査報告」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第4集 向日市教育委員会）1978

注16　注12に同じ
注17　注９に同じ
注18　五十川伸矢「京都大学教養部構内ＡＰ22区の梵鐘鋳造遺構」（『京都府埋蔵文化財情報』第５号 京埋文センター）1982.9
注19　巽準一郎氏の御教示による

資料刊行のお知らせ

第13回　埋蔵文化財研究会資料

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター編集

古代・中世の墳墓について

（追加補訂版）

Ｂ４版　856頁　頒価　8,000円　（送料含）　残部僅少

福岡・熊本・大分・宮崎・香川・愛媛・高知・岡山・広島・鳥取・島根・山口・京都・大阪・兵庫・滋賀・奈良・三重・和歌山・愛知・岐阜・福井・石川・富山・長野

以上の各府県の古代・中世墳墓の資料を集成

申し込み：郵便振替　京都 8-25584
古代中世墳墓資料刊行会

問い合せ：〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター内
古代中世墳墓資料刊行会
電話（075）256-0416・0527

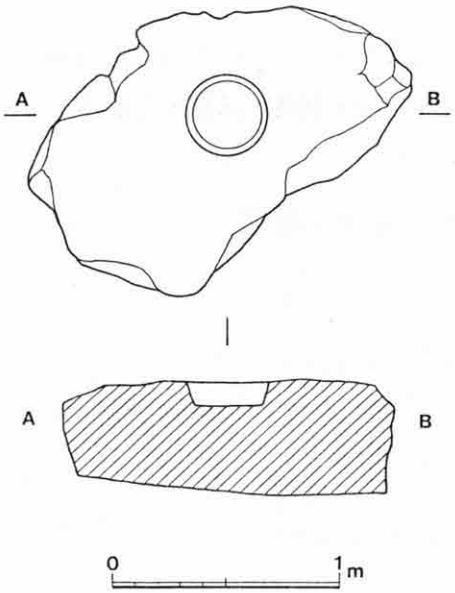
和久寺跡第1次発掘調査

大　槻　真　純

1. はじめに

福知山市は，河谷平野で形成された静かな町である。平野の中央部には三国岳に源を発する由良川が流れ，まわりは鬼ケ城・三岳山・大江山・姫髪山等の雄大な山々が連なっている。由良川の両岸は水田あるいは桑畑として利用され，時折り通過する国鉄山陰本線の列車の車窓から見える風景は，のどかな田園の風物をかもし出している。市街地は近代化の波が押し寄せつつあるが，今なお城下町当時の静かなたたずまいを残している所もある。

今次調査対象となった和久寺跡は，福知山市の西南部に所在し，国鉄福知山駅から北西約3kmの地点にある（第2図）。寺跡の位置する周辺部は水田であり，寺院が隆盛を誇っていた頃の面影を偲ぶことはできないが，寺院推定地のほぼ中央部に位置する鹿島神社の境内には，塔婆の石材と考えられる石材が散在している（第1図）。また田畑の耕作中には古瓦・土師器片等が数多く発見されている。このことから寺院であることが推定され[注1]，古代の福知山を知るうえで重要な遺跡であるとして，関係者の間では注目されてきた。ところがこのたび，この地域でほ場整備事業が施工されることになったことから，事前に発掘調査を行い，遺跡の範囲・規模等を確認し，記録を作成するとともに整備事業との調整を図ることを目的として，昭和57年10月18日から延60日間に亘り福知山市教育委員会によって調査が実施された。



第1図　鹿島神社境内の礎石

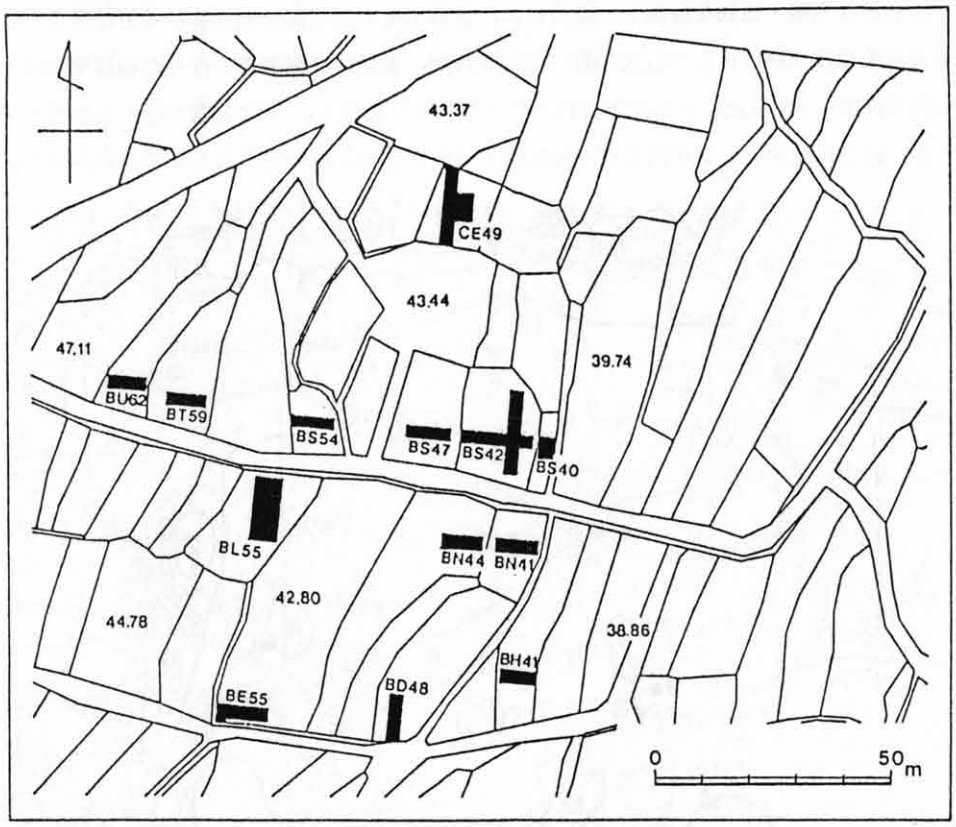
2. 調査概要

調査は，寺院推定地およびその周辺地の地区割りを行うことから開始した。地区割りは，磁北から東へ6度傾けた線を基準とし，全体の地形の傾斜および田畑の畔に沿って2mを最小単位とする方眼に区切り，主だった田畑に2m×2mおよびその倍数よりなるトレンチを設定した。そして掘削

中に顕著な遺構・遺物を検出した場合には，さらにその周辺部を掘り広げる方法をとった。調査対象地は6000 m² もの広大なものであったが，実際に発掘調査を行ったのはそのうちの約 450 m² であった。トレンチは13か所（第3図）設定し，順次掘削を行ったのではあるが，ほとんどのトレンチ内では寺院に関する何ら手がかりを得ることができなかった。

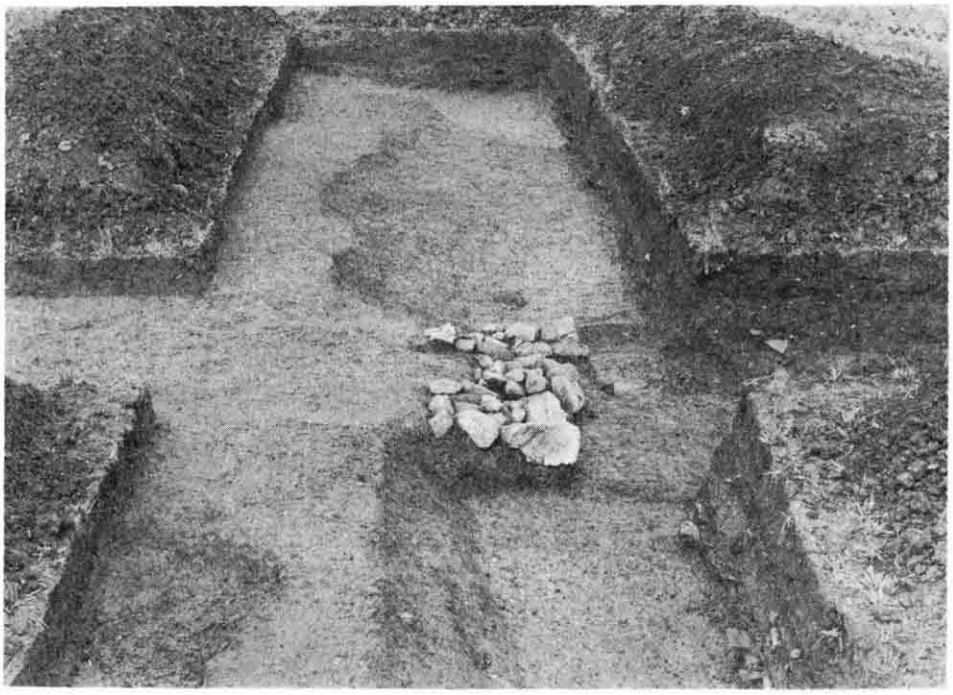
第2図　調　査　地　位　置　図

1. 調査地　2. 黒山古墳群　3. 吉見古墳　4. 吉見古墳群
5. 奥野部遺跡　6. 下山古墳群　7. 日頭古墳群　8. 昆沙門古墳
9. 大門古墳　10. 茶臼山遺跡　11. 豊富谷丘陵遺跡群　12. 妙見古墳群
13. 額塚古墳群　14. 小谷古墳群　15. 羽合ノ段古墳群　16. 向野古墳群
17. 堺谷古墳群　18. 川上古墳群　19. 向野西古墳群　20. 中ノ段古墳群



第3図　トレンチ関係図

しかし，寺院の東端確認のために設定したトレンチ内（ＢＳ42）において瓦類の密集した部分を確認し，さらにその広がり具合を追求すべく周辺部を掘り広げたところ，ほぼ南北方向に一直線に連なる瓦類および石材の集積を確認することができた。この集積は東方に向かうにしたがって低くなることから，一時期の整地の際に，壇の上面に堆積した瓦を一気に押しのけた様子を明らかに示していることがうかがわれた。このような瓦の集積によって壇の輪郭を明確にする作業は容易に進めることができ，また壇のコーナーも確認することができた。しかし一部分に人頭大から拳大の石が密集したところがあり，しかもその部分には瓦がまったく堆積していない状況であった。これが何を意味するものか今のところ明確ではないが，壇の一部分で明らかに様相が異なっていることは，壇に伴う何らかの施設があったものと考えられる。さて壇の周縁部については，前述したように瓦類にまじって多数の石材が出土し，また凝灰岩もまじっていたことから，石積みよりなる壇を想起せざるを得ないように思われる。ただ，その痕跡についてはまったく手がかりを得ることができなかった。壇の延長は約 1.4 m，遺存高 0.5 m を計測することができた。出土した



第4図　基　壇（南から）

遺物および壇の状況から礎石建物の基礎をなす壇，すなわち基壇（第4図）と考えることができるが，壇上に建立されていた建造物については礎石を据えた痕跡がまったく見うけられなかったため，今のところ推測の域を出るものではない。

鹿島神社の北側に設定したトレンチ内（ＣＦ49）においては，直径40 cmで内部に直径20 cmの柱痕を残す柱穴を南北および東西方向に整然とならべた掘立て柱建物跡2棟を検出することができた。これらはお互いに切り合い関係を持つが，柱穴の形態や内部の様子を同じくすることから，同時代的と考えられる。これらの建物跡は今のところその性格等を論ずることはできないが，規模の大きな建物を建てる際の足場杭の跡とも考えることができよう。

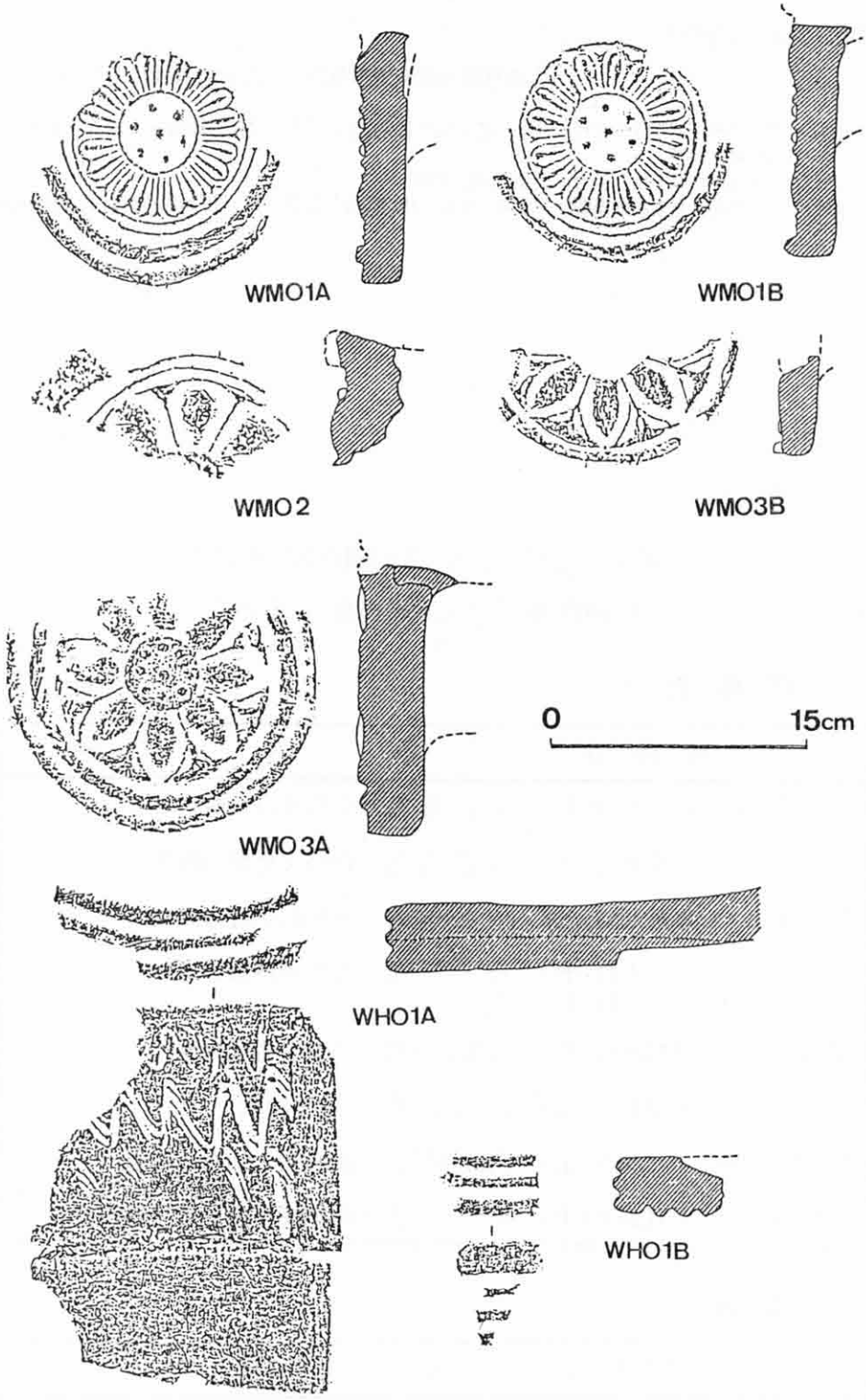
以上に紹介した遺構の他に平安時代の土器片を多量に包含した溝跡2条（ＣＥ49），和久寺創建寺の瓦を再利用した施設（ＢＳ40），および和久寺建立に際する整地層（ＢＮ44・ＢＮ41）を検出した。

今次調査で出土した遺物については，先にもすこし述べたところではあるが，今すこし報告することにする。出土した遺物は瓦類が大半を占める（第5図）。そして出土した場所は主にＢＳ42・ＢＳ47・ＣＥ49トレンチ内であり，しかも他時期の遺物がほとんど出土しなかったことから，基壇上に建立されていた建造物の時期決定をするうえできわめて意

味のある遺物であると言えよう。種類は単弁八葉蓮華文軒丸瓦・複弁八葉蓮華文軒丸瓦・三重弧文軒丸瓦・平瓦・行基式丸瓦・熨斗瓦・面戸瓦等がある。軒丸瓦にはWM，軒平瓦にはWHを付し，それに瓦当文様を確認した順に01・02・03とし，さらに文様構成が同じでも範の異なるものをA・Bと細分した。WM01は複弁であり，周縁内側に面鋸歯文を施す。また蓮子は1+6で2重の圏線を持つ。焼成はWH01A・Bともに堅緻である。WH02は単弁で，周縁に珠文を施し，復元すると花弁は単弁で八葉になるが中房については不明である。焼成は軟質である。WH03は単弁であり，全体を肉太につくる。蓮子は1+8で焼成はWH03Aが軟質で，02Bは堅緻である。WH01A・Bとも同文であるが，01Aは顎部にヘラがきの波状文を施し，焼成は良好である。01Bは顎部に弧文状の段を有し，焼成は軟質である。平瓦は凸面に斜格子・正格子および菱格子を有するものばかりである。丸瓦は行基式に限られる。熨斗瓦は菱格子の平瓦を縦に半砕して利用している。面戸瓦も菱格子の平瓦を利用している。以上の他に土師器・須恵器等が出土しているが，ほとんどが細片である。

3. おわりに

今次発掘調査の概要については以上に略述してきたとおりである。広大な調査対象地域のうち，実際に発掘調査を実施したのはごく一部分だけであり，当初目的とした寺域の範囲を明確にすることはできなかった。しかし予想と反して建物基壇の一部や掘立て柱建物跡等の遺構を検出することができたことは，和久寺の地に明らかに寺院が建立されていたことを立証できたことになり，また今後の調査について一種の方向性を見い出せたと言っても過言ではないであろう。和久寺の創建については，伴出した遺物から奈良時代前期に位置づけられる。しかし，その後の遺物がまったく出土しなかったことから，すくなくとも今回検出した基壇上に建立されていた建造物は修復もされずに衰退したものと考えられ，その後は整地されて今日まで水田として利用されてきたのであろう。出土遺物については十分な検討を加えてはいないが，摂津あるいは山陽・山城といった地域との交流を物語っているものが多い。たとえば平瓦凸面に施されている斜格子および正格子の叩目文は，伊丹廃寺(注2)において同種のものが出土している。またWH01Aの顎部に施されたヘラがきの波状文と同種のものは山陽地域において出土しているし，WH01Bの顎部に施された弧文状の段を有するものは山城地域(注3)において出土している。ただ技法上の問題はいろいろあるにせよ，同種類の文様が丹波地域においても確認できたことは，文化の交流を十分に物語っているものと言えよう。今後は，この種の文様等を考慮した上での比較検討が必要であり，瓦当文様あるいは技法上の問題点を明確にしていくことが課題である。このことについて



第5図 軒 瓦 拓 影

は後日に改めて報告することにしたい。

（大槻真純＝福知山市教育委員会社会教育課主事）

注1　佐藤虎雄「下豊富村字和久寺廃寺礎石及出土古瓦」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第8冊 京都府）1927
注2　『摂津伊丹廃寺跡』伊丹市教育委員会 1966
注3　「平川廃寺発掘調査概要」（『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会）1973

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

昭和58年度 研修会・講演会 開催予定

研　修　会

回	開　催　日	会　　場	内　　容
第14回	58年5月21日(土)	福祉会館	中近世の城館
第15回	6月24日(金)	福祉会館	埋蔵文化財の保護について
第16回	8月20日(土)	京都市内	昭和57年度の調査
第17回	10月1日(土) 2日(日)	丹　　後	竹野川流域の遺跡
第18回	11月5日(土)	山城資料館	山城の古代寺院
第19回	12月17日(土)	京都市内	(古墳時代)
第20回	59年1月28日(土)	丹波(綾部)	由良川・加古川の道
第21回	2月25日(土)	乙　　訓	昭和58年度長岡京跡の調査

講　演　会

第2回	59年1月29日(日)	丹波(綾部)	(弥生時代)

古代エジプト遺跡を訪ねて (4)

小 山 雅 人

V アマルナ時代

第1図 王妃ネフェルティティ胸像
(ベルリン博物館)

アメンホトペ四世——自ら改名してアケナーテンの「宗教改革」については，高校の教科書にも書いてあるので，エジプト史の中でも，ピラミッド，クレオパトラ，ツタンカーメンの次くらいには知られている事件であろう。前1379年，改名したアケナーテンは，処女地——中エジプトのエル・アマールナに王宮を遷し，新都のアケターテンの建設を開始する。彼の神はアーテン（本来「日輪」を意味する普通名詞）という。この神の特徴は，この「教祖王」アケナーテンに言わせれば，唯一の神であり，他のエジプトの諸々の神々はすべて偽だというのである。従って，第18王朝の栄光の神アメン・レーエも否定された。そこで王はこの巨大な神殿勢力を敵にしてしまったのである。古来エジプト人は，新しい物を取り入れるのに決して消極的ではないのであるが，必ず古いものも残しておくのである。だから，アケナーテンも，「我が神しかない」と言わずに，「我が神が最高」と言っておれば，後の悲劇も起こらなかったであろう。しかし，それではアーテンという神の史的価値はなくなり，アケナーテンも一風変ったただのファラオに過ぎなかったであろう。

アケナーテンの宗教も大いに興味深いが，アマルナ時代とポスト・アマルナ時代の彼とその家族の運命も非常に歴史的魅力に満ちている。王妃ネフェルティティは，古代エジプト史上最高の美女（好みにもよるが）とされ，最近は宗教革命には彼女もかなりの役割を果していたことが知られ始めている（第1図）。夫王アケナーテンは，お世辞にも美男子とは言えない（むしろ醜悪）が，ともかく2人の間には6人の王女（ばかり）が生まれている。長女メリターテンは，王家の跡取り娘として父王に可愛がられたらしいが，若くして亡くなった。先年の古代エジプト展に出品されたカイロ博のカノープス壺の蓋の美しい

第2図　トゥタンカムーン王と王妃アンケセナムーン
（カイロ博物館蔵木箱蓋装画）

頭像が彼女のものとされている。次女は早世していたので，三女アンケセンパアーテンが，姉に代わって，夫になる王子に王位継承権を与える女性となった。

アケナーテンの死後，王都はテーベに戻り，そこで即位した王，トゥタンカムーン（前1361～1352）の妃は彼女であり，アムーン信仰にふさわしく，アンケセナムーンと改名している。この少年王の墓は，奇しくもシャンポリオンによるヒエログリフ解読からちょうど100年後の1922年に発見されて，余りにも有名であるが，その遺物のいくつかにこの若い国王夫妻の姿が描かれている（第2図）。お互いに非常に愛情に満ちたしぐさを見せているが，このような国王夫妻像は，アケナーテン・ネフェルティティ夫妻とこのトゥタンカムーン・アンケセナムーン夫妻に限って見られるもので，エジプト美術全体から見れば，はなはだ異例的なのである。少年王が18，あるいは19才で死亡すると，この愛らしい未亡人は，とんでもない行動に出る。臣下を夫，つまり王とするのは耐えられないので，異邦ヒッタイトの王シュッピルリウマに密書を送り，王子の一人を彼女の夫たる王として迎えたいと言うのである。異国の王は最初疑うが，再度王妃の密書が届き，王子を送り出すが，彼はエジプトへ着く前に何者かによって暗殺されてしまったらしい。

結局，アンケセナムーンは，アケナーテンの老臣アイの王妃となり，アイが即位する（前1352～1348年）。しかし，彼の王妃は殆どの史料でテイ（以前からの彼の妻）であり，アンケセナムーンは以後，杳として消息が絶えてしまうのである。アイの短い治世の後，今度はアケナーテン王時代以降の将軍ハレムヘブが，ネフェルティティの妹を王妃として即位した（前1348）。子がなかった彼は，年老いた部下プラメセスに王位を譲り，ラメセス朝（第19・20王朝）が始まるのである。

このように前14世紀のエジプトの歴史は，希代の異端王アケナーテンの登場と第18王朝の伝統として歴史の表面での女性の活躍，将軍ハレムヘブに始まる軍人の台頭があり，更に上述のあらましでは触れなかったが，広大なエジプト帝国各地での反乱と，アケナーテ

第3図　アマールナ北王宮跡（西から）

第4図　アマールナ都城中央部にて

ンの「平和主義」(あるいは「軟弱外交」) による帝国の瓦解など，物語のような面白さがある。実際，欧米ではこの時代を舞台にした小説が夥しく書かれている。

エル・アマールナの対岸まで，メニアからタクシーでぶっとばす。ナイルを渡ると，さすがにここは観光地であり，観光バスならぬ観光トラクターがある。これに乗って砂漠を越え，岩窟墓群のふもとまで行き，岩山を登るのである。ディヴィス夫妻の模写を通じてかなりアマルナの壁画は知っており，各墓地でその絵を探すのであるが，殆ど見えない位に傷んでおり，写真も失敗だらけで，本稿に載せられないのは残念至極である。

岩窟墓の次に訪ねたのは，北の王宮であるが，王が愛情を長女メリターテンに移した後，ここは美貌の王妃ネフェルティティが，別居して住んだところである。恐らく極彩色の壁画が描かれてあったのであろうが，壁は日乾レンガの基底部のみを残すだけである。1か所石の礎石が並んでいた (第3図)。

この短命の都の中心部も瓦礫の山としか言いようがない。発掘は数次に亘って行われているのであるが，銘文のある石材やその破片が夥しく転がっている (第4図)。日本であれば，平城宮的規模で整備するであろうに，もったいない話ではある。

カイロ博物館で，トゥタンカムーン王墓の副葬品をゆっくり見ることが出来たが，やはり素晴らしい。宝飾技術は中王国より劣るとか，金ピカ趣味とか言ってみても，所詮負け惜しみになってしまう。アマールナ遺跡が平城宮跡とすれば，ここは正倉院なのである。

筆者は，以前「王妃ネフェルティティに就いて」(『古代文化』第27巻第2号) という学界展望を書いた頃から，この美しい王妃を密かに恋していたのであるが，エジプト全国の土産物屋で，膨大な量の醜悪な胸像(モデルは言うまでもなくベルリン博の名品・第1図) や絵を見続けて，これを全世界の人が買って行くのだと思うと，気持ちの冷めていくのを感じた。エジプトの土産物は，特にそれが古代美術品のコピーであれば，殆どが不細工でつまらないが，まれに安価でハッとする程古代のものに近いのがある。今，筆者の書斎には，パピルスに描かれた1人の第18王朝の貴婦人の横顔の絵が掛っている。

(小山雅人＝当センター調査課調査員)

昭和57年度発掘調査略報

16. 洞 楽 寺 古 墳

所 在 地　福知山市大字大内小字後正寺

調査期間　昭和57年9月6日～12月10日

調査面積　約 400 m²

調査概要　洞楽寺（とうらくじ）古墳（調査地位置図1）は，洞楽寺裏の台地端にある直径 14～16 m，高さ 1.5 m（東側）の円墳である。かなりの傾斜地にあるため西側での比高差は 3.5 m もある。当調査は，日本道路公団が計画する近畿自動車道舞鶴線の事前調査として行ったものである。

調査の結果，横穴式石室墳であることが判明した。既に天井石等はなく，奥壁1枚，東側壁の最下段2枚，西側壁の最下段1枚が遺存していたのみであった。埋葬面は奥壁に近い部分のみ確認できた。すなわち，奥壁に沿って須恵器杯が蓋とセットとなり検出され，奥壁から1m離れた所では棺台と思われる平らな石が3個検出された。須恵器杯は陶邑編年のⅡ—3・4段階に相当し，おおよそ6世紀後半代であろう。主な出土遺物として，須恵器杯・蓋・壺・甕・提瓶，土師器高杯，鉄刀，銀環4等がある。

古墳時代以外の遺構としては，墳丘の北側，周濠内に墓2基のあることが判明した。墳墓ＳＸ８は20～30 cm 大の角礫を 1 m 範囲ほどに置き，その下に 30 cm 四方の平石を据えたもので，この下に須恵器壺（底部欠損）と鉢を埋置していた。壺には骨が入れられており，鉢を受け皿のように下に据えていた。この北側には径30 cmほどのピットがあり，火葬骨が埋められていた。また，墳丘の南側，つまり前庭部では墳墓ＳＸ６が発見された。これは，20～30 cm 大の角礫を置き，その中に五輪塔の火輪を置いたもので，下には穴を掘り骨を埋めてあった。近年，古墳と中世墓が近接して発見されることが多く，霊地意識の変遷を知る上で当遺跡も貴重なデータを示すこととなった。

調査地位置図

（伊野 近富）

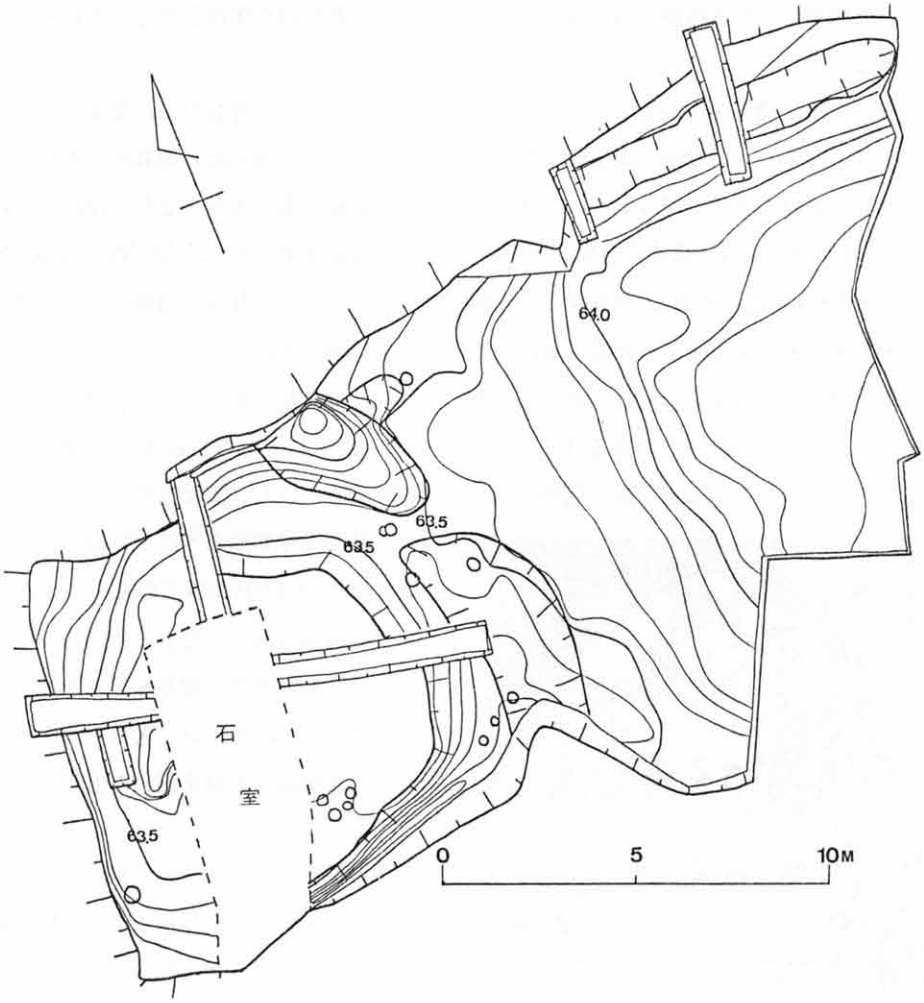
17. 後正寺古墓・小屋ケ谷古墳<図版1>

所 在 地　福知山市大字大内小字後正寺

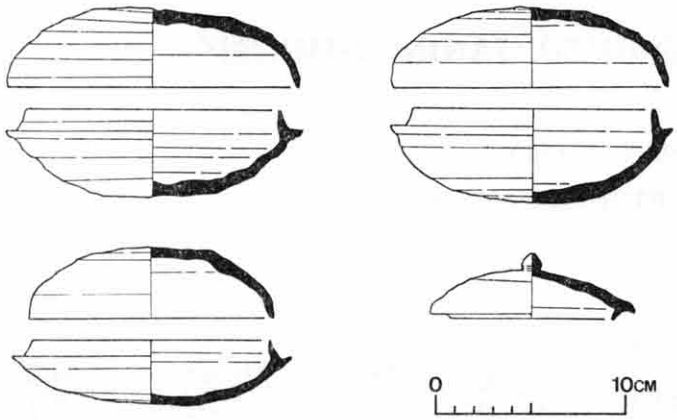
調査期間　昭和57年6月26日～12月8日

調査面積　400 m²

調査概要　本調査は，近畿自動車道舞鶴線の建設に伴う事前調査として実施した。当初，調査地（前頁位置図2）の西南に高さ約50 cmの塚が3基あり，中世墳墓と推定して調査に着手した。



第1図　小屋ケ谷古墳測量図



第2図　小屋ケ谷古墳石室内出土須恵器

これらの塚は，表土を剝ぐと，20～30 cm の自然石が表面に葺かれていた。内部には，明確な埋葬施設は認められなかった。これらが造られたのは江戸時代中期頃であり，近接して礫が多く詰まった土壙3基を含む，同時期の土壙7基を検出したことなどから，埋葬に関わる施設と判断した。

西端にある塚の下からは，塚造営以前の土壙を検出した。内部から，焼土と炭化物が出土したが，時期決定をしうる遺物はなかった。この土壙の東方約1.5 mのところに，黒色土器椀・瓦器椀・須恵器ねり鉢・宋銭が埋納された状態で出土したこと，周囲には他の遺構がないことから，埋納土器と土壙との関係を想定する蓋然性は高く，そうするとこの土壙は墓であった可能性があり，時期はそれらの土器から平安時代末といえる。

調査を進めていくと，当初現地で見られた塚の下から，予想だにしなかった古墳が見つかった。昨年度，当センターが調査を行った「後青寺古墳」（本遺跡より約100 m南）と混同しないように「小屋ケ谷古墳」と命名した。

小屋ケ谷古墳は，墳丘の西側，北側が削平を受けているが，東部の残りは比較的よく，墳丘裾に幅約2 mの周濠が検出できた。石室中央と墳丘裾までの距離により，径約12mの円墳に復元できる。墳丘は約60 cmしか残っていなかった。内部主体は両袖式の横穴式石室で，玄室長 4.36 m，玄室奥壁幅 1.38 m，羨道の現存長 3.0 m をはかる。天井石は全くなく，側壁も2～3段残すのみであった。

埋葬面は，遺物の出土レベルから三面検出できた。骨の出土は全くなかった。遺物の残り具合は概してよく，杯身・杯蓋・瑞などの須恵器，高杯・長頸壺などの土師器，直刀・矛・馬具（轡2組）などの鉄製品，装身具が出土した。須恵器は中村 浩氏の編年によるとⅡ型式4段階からⅢ型式1段階までのものである。

他の遺構としては，集石遺構，中世末～近世初頭の建物跡2棟，14世紀代の土師器皿を多数埋納したピットなどがある。特に建物跡は，大内城跡，後青寺跡にはさまれた立地をしている当遺跡と，両遺跡とを関連づけるものとして注目される。　　（岩松　保）

18. 長岡京跡右京第105次（7ANINC-2・IMK地区）<図版2>

所 在 地　長岡京市今里西ノ口・舞塚

調査期間　昭和57年7月12日～昭和58年1月26日

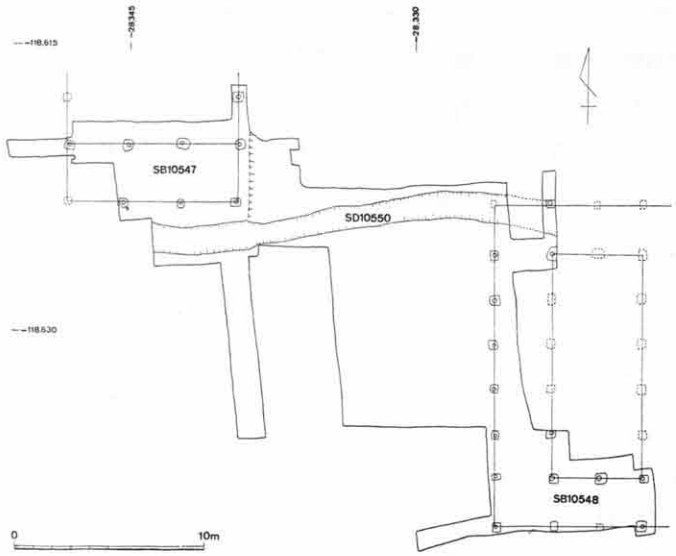
調査面積　約 1.400 m²

はじめに　今回の調査は，都市計画街路石見・淀線建設工事に伴い前年度に引き続き実施したものである。前年度の調査では，奈良時代～長岡京期の建物跡や道路側溝，中世の大溝，古墳時代から奈良時代の自然流路（河川）などを検出した。今回の調査は，今里西ノ口地区（7ANINC－2地区）と今里舞塚地区（7ANIMK地区）で実施し，以下に述べるような成果を得た。

第1図　調査地位置図（1/25,000）

調査の概要　今回の調査では，今里西ノ口地区でA～Eの5つのトレンチ，今里舞塚地区でF～Iの4つのトレンチ，計9つのトレンチを入れた。今里西ノ口地区では，昨年度の今里西ノ口地区での調査で検出した奈良時代から長岡京期の建物跡や中世の大溝に関係した遺構が，舞塚地区では，京都府の行った下水道今里西幹線の立会調査の結果(注)や地名から，その存在が考えられている古墳（舞塚古墳）が，それぞれ検出されるのではないかと期待された。

今里西ノ口地区の5つのトレンチのうち，Cトレンチは，池と川のため遺構面は残存していなかった。A・B・C・Dの各トレンチからは，中世の溝や柱穴などの遺構を多数検出した。特にBトレンチにおいては石積みの井戸，Dトレンチでは，瓦器椀や土師皿の土器溜りを検出した。Bトレンチで検出した井戸は，掘形の一辺約 220 cm，井戸の内径約

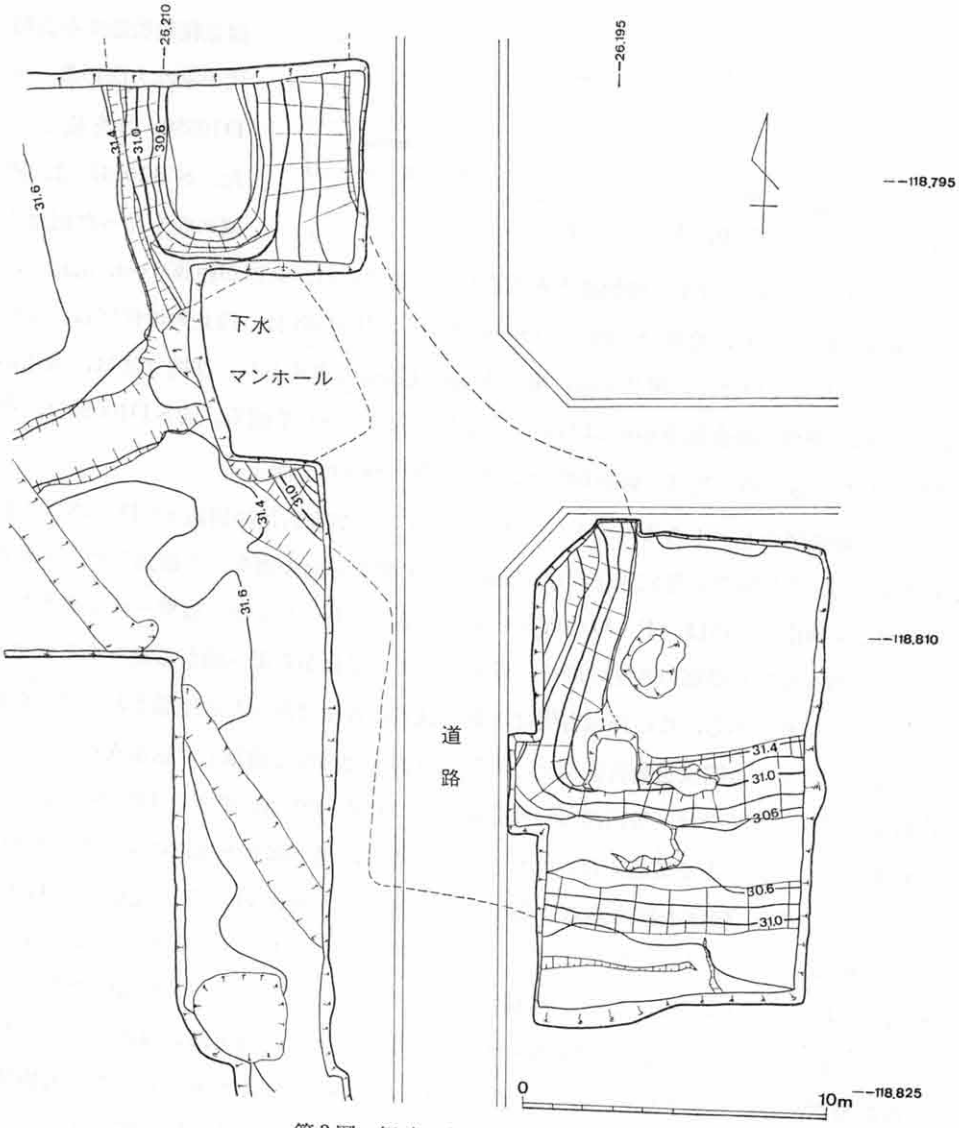


第2図　Eトレンチ遺構図

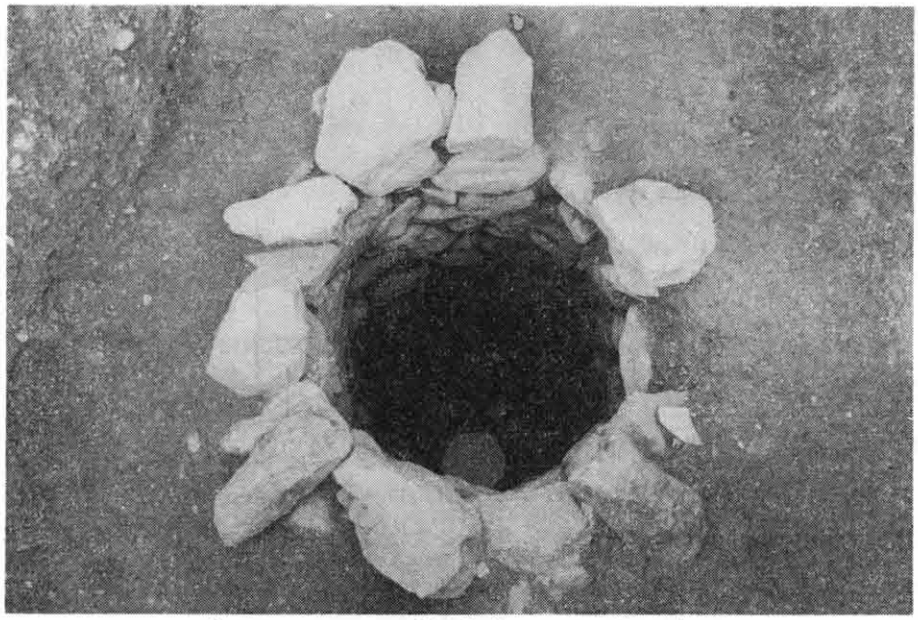
80 cm，深さ約 500 cm を測る。Eトレンチでは，長岡京期と思われる東西3間，南北2間以上の建物跡（SB10547）と南北7間，東西3間以上の建物跡（SB10548）の2棟の掘立柱建物跡や奈良時代の東西方向の溝（SD10550）等を検出した。SB10547 は，南側に庇を持った南北3間，東西3間の規模を有する建物跡と考えられ，柱間寸法は，東西が約 300 cm，南北が，身舎部分で約 240 cm，庇部分で約 300 cm を測る。SB10548 は，西北角の柱穴は，現代の攪乱で失われていたが，南北7間，東西4間の建物跡と考えられ，柱間寸法は，南北が約 240 cm，東西の身舎部分が約 210 cm，庇部分が約 270 cm を測る。溝SD10550は，やや蛇行しながら東西に延び，幅約100 cm，深さ約30～60 cmを測る。

今里舞塚地区のF～Iの4つのトレンチにおいては，舞塚古墳の周濠（SD10565）や弥生時代の溝，古墳時代の竪穴式住居跡，長岡京期の南北方向の溝などを確認した。舞塚古墳の周濠を検出したのは，F・Gの両トレンチである。Fトレンチでは東へ弧を描きながら北から南へ延びる周濠の外側の肩を，Gトレンチでは北から東へ曲がる周濠をそれぞれ検出した。これらから，この舞塚古墳は，帆立貝式の古墳であったと予想され，周濠の幅等を確認する為，長岡京市教育委員会，長岡京市都市計画課と協議し，拡張を行った。その結果，Fトレンチでは，後円部の周濠を検出し，幅約 600 cm，深さ約 110 cm を測り，土橋を持っていたことを確認した。ただ，この土橋は，南半部が下水道のマンホールの為に壊されており，幅は不明である。高さは，周濠底より約90 cmを測っている。Gトレンチで検出した前方南側の周濠部分は，幅約 500 cm，深さ約70 cmを測る。これらの周濠内には転落石等もみられず，この古墳には，葺石等は施していなかった模様である。しかし，周濠内からは，多数の円筒埴輪片が出土するとともに，前方部の周濠からは，人物埴輪の頭部が出土するなど，この古墳が埴輪を持っていたことが判明した。この人物埴輪は，頭部長約15 cmを測り，やや縦長の顔に，やや細い木ノ葉形の目と真っすぐにのび

る鼻，小さな口を配し，側頭部から後頭部にかけて線刻を入れ，後頭部に粘土紐をつけて頭髪を表現している。円筒埴輪は，縦ハケを施し，円形の透しを持っている。また，この周濠内には，灰黒色を呈する粘土が堆積し，水を湛えていた形跡を残している。この古墳は，出土した埴輪等から6世紀前半頃のものと推定され，規模は，極く一部を検出したのみなので不正確ではあるが，全長 50 m 近くは有していたと考えられる。この調査地区では，他に，前述した様に，Hトレンチで，幅約260 cm，深さ約60 cmを測る弧形を呈する古墳時代の溝を，Iトレンチでは，幅約200 cm，深さ約30 cmを測る南北方向に延び



第3図　舞塚古墳平面図



第4図　Bトレンチ石積み井戸ＳＥ10521（東から）

る長岡京期の溝，古墳時代の竪穴式住居跡の一部と思われるもの２基，北東から南東に延びる，幅約 80 cm, 深さ約 30 cm を測る弥生時代の溝などを検出した。このうち，Hトレンチで検出した溝は，その形状から古墳の周濠の可能性が強い。また，Ｉトレンチの長岡京期の南北方向の溝は，西三坊坊間小路の側溝である可能性が高い。

まとめ　今回の調査では，以上述べた様な成果を得た。北方部の今里西ノ口地区で検出した奈良時代の溝や長岡京期の掘立柱建物跡は，昨年度の調査成果と合わせ，この一帯に奈良時代～長岡京期の集落が存在していたことを物語っている。特に，今回のＥトレンチで検出した長岡京期の建物跡は，共に庇を持ち，この場所に有力者の邸宅があったことを窺わせる。また，中世の柱穴や井戸の検出は，この地一帯に，中世の今里の集落の一部が存在していたことを裏付ける。

南方部の今里舞塚地区での，舞塚古墳の周濠の検出は，以前から言われていた舞塚古墳の存在を裏づけ，帆立貝式の古墳であることをほぼ判明させた。弥生時代の溝や古墳時代の住居跡等の検出は，この地に弥生時代や古墳時代の集落が存在していたことを検証した。これらは，舞塚古墳に人物埴輪が存在していたこととあわせ，乙訓地域での弥生時代や古墳時代を考える上で良い資料となるであろう。　（山口　博）

注　高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1979)』 京都府教育委員会）1979

19. 伏 見 城 跡

所 在 地　京都市伏見区桃山毛利長門東町8

調査期間　昭和58年1月13日～2月28日

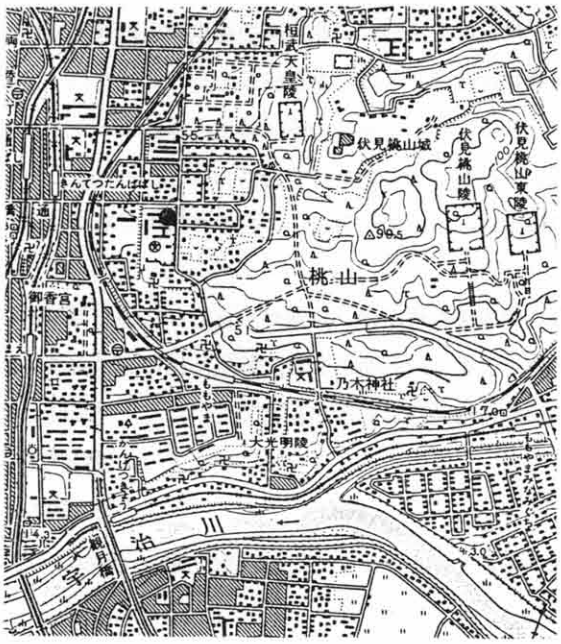
調査面積　約 1,100 m²

はじめに　この調査は京都府立桃山高等学校の校舎増改築工事に先だち行ったものである。調査対象地は南から格技場部分，教室棟，昇降口の3か所あり，それぞれA・B・C地点とした。

伏見城は1592年（文禄元年）から，豊臣秀吉によって築城され，その後，地震・合戦等によって崩壊・炎上したが，その都度，様相を変えつつも復旧され，1623年（元和9年），廃城となるまで存在した城である。

城の主郭部分は現在桃山陵一帯と考えられるが，当調査地付近も，いわゆる内城の一画にあたり，大名屋敷等が存在していたことは，古地図，地名，地形，あるいは以前の調査によって判明していた。

調査概要　調査はまず，A・B地点にトレンチを入れることから開始し，遺物包含層等が確認されたため，すぐに拡張を行った。C地点は調査期間の後半に掘削を行った。A・B地点では地山面までが浅く，表土下，すぐに地山という部分も多かったが，ここが学校用地となって以降の新旧建物の建築・解体に伴う攪乱も数多く認められた。

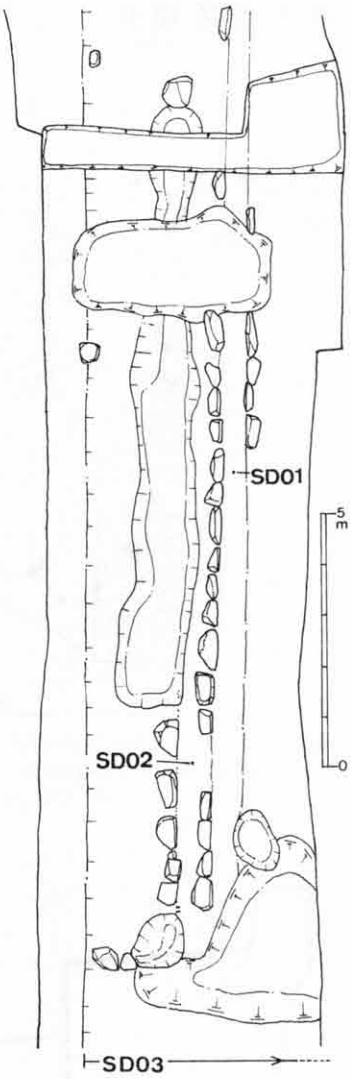


第1図　調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

A地点では石組溝2（SD01・02），堀状の遺構（SD03），建物礎石3等を検出した。SD01～03はすべて方向を同じくし，南北に延びるものである。攪乱・調査範囲の制約によって，その全体像を明確にすることはできなかったが，

その概要は以下のとおりである。ＳＤ03はトレンチ中央部で幅5.８ｍ以上，深さ0.７ｍを測り，調査地の南北，全体に続く。東側はトレンチ外に続くため，その立ち上がりは不明である。それを埋め，石組溝ＳＤ02が形成される。ＳＤ02は多くの石が抜き取られ，また東側はＳＤ01と重複するため，極めて遺存状態は悪く，その痕跡は石の抜き取り穴を含め，北へと続くが，南側では西に折れ曲がり，そこで終わっている。最終的に形成された石組溝ＳＤ01も攪乱，石の抜き取り等によって乱れているが，北側で約19ｍ，トレンチ南端で2ｍを確認した。石はＳＤ02よりもやや小型のものが用いられていたが，溝の内側は丁寧に面がそろえられていた。ＳＤ01・02ともにトレンチ中央部では検出できず，その約12.５ｍの間，溝が形成されていない。

Ｂ地区では，調査地の東半において，井戸と土壙を検出した。井戸の一つは上部の掘り込みが径６ｍ，本来の井戸枠が径1.７ｍの規模であり，深さ約3.７ｍまで確認した。土壙の数基は，土壙の側面から底面にかけて，全体に土師皿と灰によって埋め尽され，他の少量の瓦，陶器類とともに一括投棄された様相を示していた。しかし，埋土上部に遺物はほとんどなく，そうした土壙を後に整地する時に土を入れ，つき固めたものと考えられた。



第２図　Ａ地点遺構平面図（部分）

Ｃ地点では地表下約1.８ｍで地山に達したが，地山面より約1ｍの厚さまで土を入れ，整地されていたことが確認できた。客土層上面において少量の遺物を検出したが，特に顕著な遺構は認められなかった。

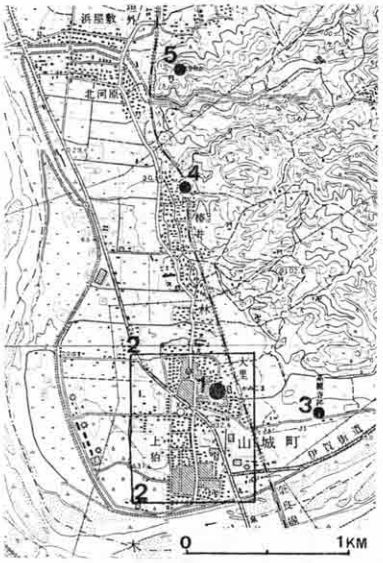
出土遺物は瓦類が量的には大半を占めるが，土師皿の量も多量にのぼった。他に陶器，木器，銭貨，鉄製品が少量ながら出土している。

遺構・遺物ともに，その整理は開始したばかりであるが，Ａ地点の重複する溝，Ｂ地点の土壙内の一括遺物など，今後，伏見城を考察する上での貴重な資料になるものと考えられる。

（長谷川　達）

府下遺跡紹介

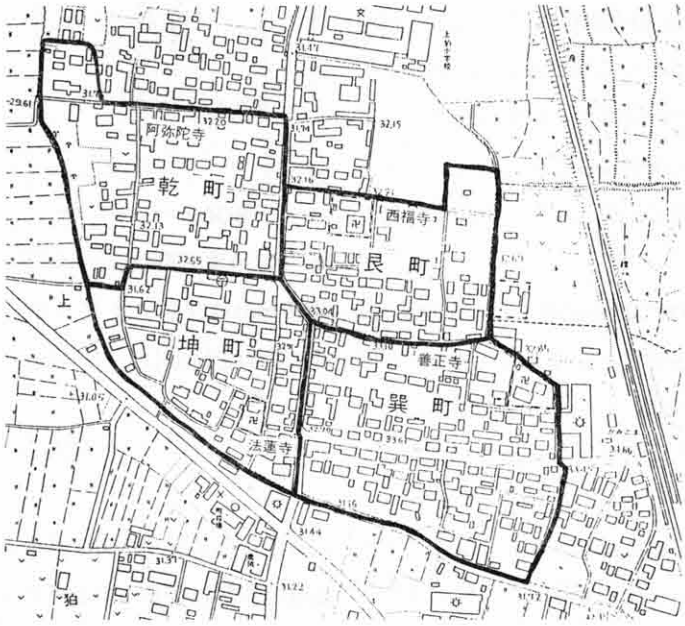
9. 大里環濠集落



第1図　所在地及び周辺遺跡分布図
1. 大里環濠集落　2. 山城国府跡
3. 高麗寺跡　4. 椿井大塚山古墳
5. 平尾城山古墳

本集落は相楽郡山城町上狛に所在する。国鉄奈良線上狛駅以西周辺が集落範囲で，現在は濠もコンクリートに変貌し，排水溝になっている。又，狛氏の居館の城郭化の為，狛城とも呼ばれる。

棚倉駅から上狛駅に至る途中に石垣が見えるが，これが椿井大塚山古墳で，丁度，この部分が後円中央部に当る。舶載鏡36面(32面は三角縁神獣鏡)，刀剣，槍，短甲，銅鏃，斧，鎌，刀子，鉇等が出土した。他に平尾古墳，弥生時代の集落跡である湧出宮遺跡，山城国府跡等がある。高麗寺跡は高句麗の渡来氏族狛氏が当地周辺に君臨していたことを傍証している。金堂は白鳳期に建立され，寺跡より飛鳥期から平安期にかけての遺物が出土している(第1図)。



第2図　大里環濠集落字割図

さて，環濠を持つ集落は弥生時代にもあり，溝（濠）の用途は「集落間の境界表示」「防禦」「用水路」「交通路」等考えられる。一方，中・近世の環濠集落は弥生時代のそれとは異なり，古代条里集落が防禦的村落に改変されたことにより環濠を持ったものと現在理解されている。

山城盆地，特に，南部には伊勢田，大久保，

平川，寺田等の20の環濠集落があり，大和郡山，稗田環濠集落の様に明確な濠こそないが，条里地割に合致している。当地域に環濠集落が集中した理由は基本的には，低湿地にある集落の自衛手段として容易に造営できたからであろう。巨椋池は明治中頃以降，小規模な干拓が何回となく行われ，昭和16年11月に現状況になったが，その周辺に第3図に見られる様な分布を示す事は，環濠集落を考える上で極めて示唆的である。

歴史的には，山城守護職の事実上の争奪戦―応仁の乱―が勃発し，文明9年（1477）12月，上山城三郡の土豪が会議を開き，会議の成否を農民が見守る為集結した事件を山城国一揆と言うが，その際，中心的村落となったのが大里環濠集落と言われる。

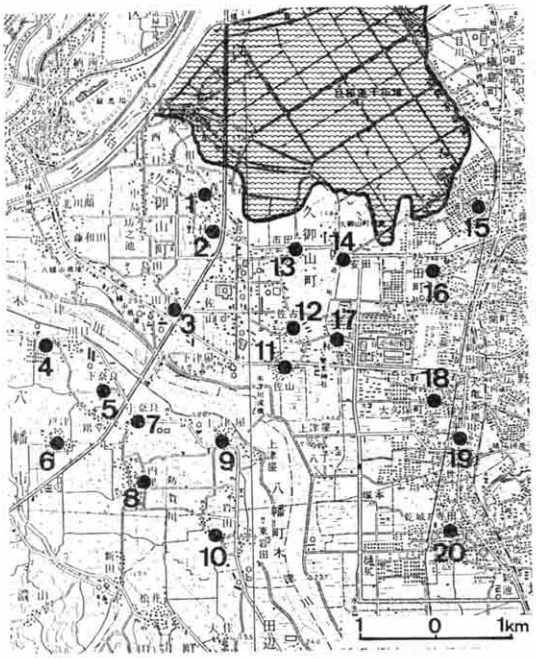
大里環濠集落の乾・坤町と艮・巽町の間を通る道は旧奈良街道であり，伊賀，伊勢方面に通ずる一つの分岐点として古代からの交通の要衝地であった。又，各町に寺が造営されている事実は，大里環濠集落の成立過程，或いは，構成を知る上で有効な根拠となろう。

最後に，本山城地域は湿地帯であり，古代より農耕に適した場所であったろうし，古墳時代に於いても，椿井大塚古墳等の大型古墳を造営できる権力を有する豪族の存在を肯定できる。この事から集落が集中する基盤は，古くから形成されていたことは誰しも認めるであろう。

本集落に見る景観は，郷土史研究には非常に有効なものであり，是非，一見して欲しい。

小編作製に当り，山城郷土資料館高橋美久二氏には色々お世話になった。記して深謝する。

（小池　寛）



第3図　山城盆地（南部）環濠集落分布図
（波線＝巨椋池）

1. 森	2. 野村	3. 田井	4. 川口
5. 下奈良	6. 戸津	7. 上奈良	8. 内里
9. 上津屋	10. 岩田	11. 佐山	12. 佐古
13. 市田	14. 安田	15. 小倉	16. 伊勢田
17. 林	18. 大久保	19. 平川	20. 寺田

〈参考文献〉

○「平野の開発」　谷岡武雄　古今書院 1964　○「日本城郭大系　11」新人物往来社 1980　○「京都府の地名」平凡社 1981　○「私たちの上狛・上下」中津川保一『やましろ 12, 14』所収 1972, 1976　○「歴史がつくった景観」　足利健亮ほか 1982

長岡京跡調査だより

今年度の4月から行っている長岡京連絡協議会も，この3月で1年が経過した。その中で，向日市教育委員会，長岡京市教育委員会，大山崎町教育委員会，(財)京都市埋蔵文化財研究所，(財)長岡京市埋蔵文化財センター，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの行ったそれぞれの調査の報告が行われてきた。今年度の長岡京跡内における発掘調査は，一覧表にあるように，宮内13件，右京34件，左京13件の合計60件が行われ，その中でも，宮内第116次調査で，朝堂院の西第4堂が東西の桁行が10間以上あることが確認されたり，また右京第96次調査の五条大路の検出や，左京第87次調査で東二坊大路が検出されるなど，さまざまな成果があがっている。

さて，今回は1月26日，2月23日，3月23日の長岡京連絡協議会で報告されたものを含め，今年度行われた調査の中で，主だったものを簡単に述べたい。

宮内第116次　(1)　向日市教育委員会

朝堂院西第4堂の調査で，西第4堂が東西棟で，南北4間，東西10間以上の規模を持つことが確認された。この結果，第4堂は，東西の桁行が11間であると推定されている。

宮内第119次　(2)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

北西から南東に流れる長岡京期の溝を検出した。また他には，中世の柱穴群を検出している。(本誌第4号参照)

宮内第123次　(6)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

南北2間，東西5間の東西棟の長岡京期の掘立柱建物跡を検出した。柱間寸法は，南北で東西ともに約2.7mを測る。(本誌第6号参照)

宮内第125次　(8)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

北西から南東へ流れる幅約4m，深さ約20cmを測り，神功開宝や和銅開珎などの銅銭や，木簡の出土した長岡京期の流路や，東一坊大路の側溝の可能性の強い長岡京期の南北溝を検出した。(本誌第6号参照)

宮内第128次　(11)　向日市教育委員会

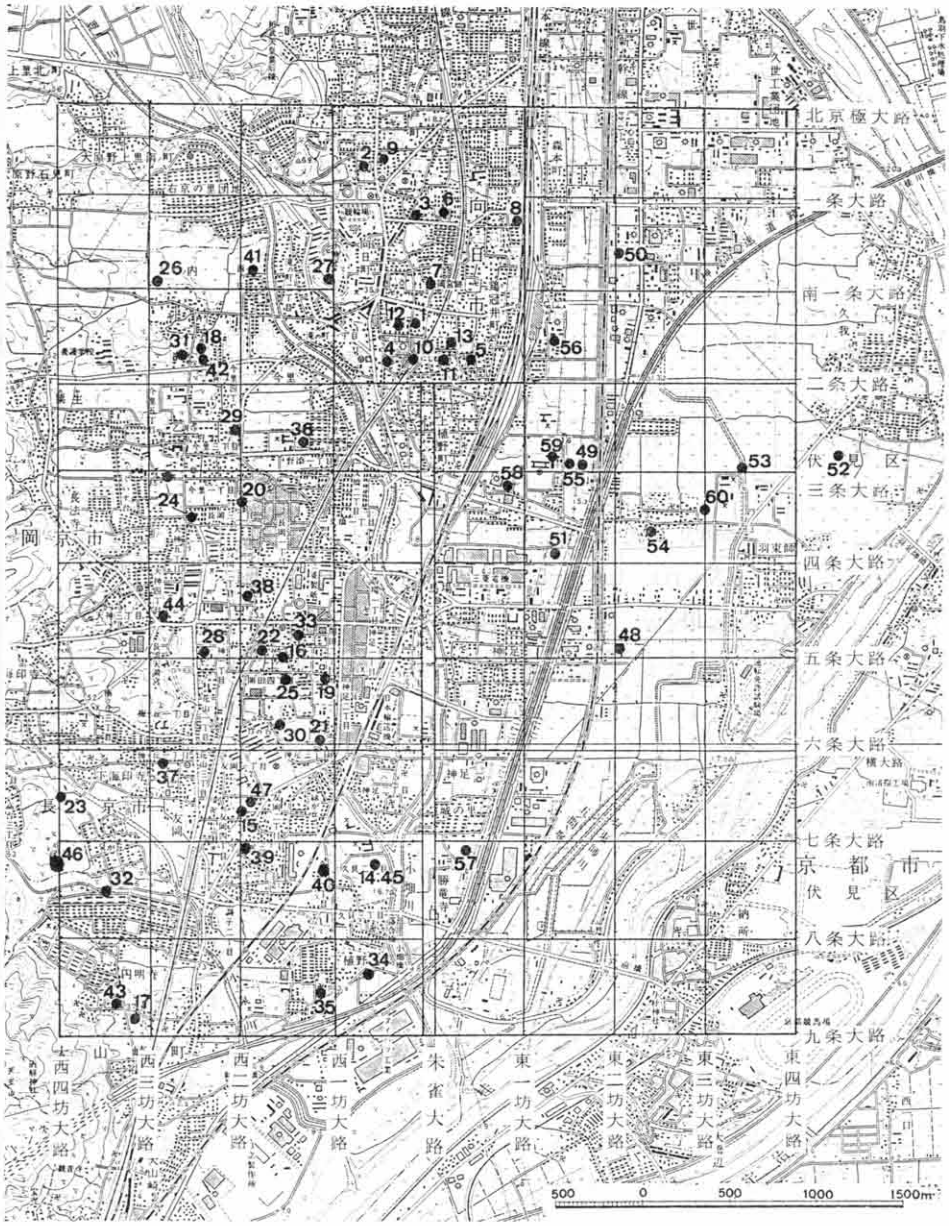
この調査では，東西5間以上を測る長岡京期の掘立柱建物跡の柱列が検出され，その上に長岡宮式，平城宮式等の軒瓦を含んだ

大規模な整地層が確認された。また，上記の建物跡を検出した遺構面で「春宮」と記された墨書土器が出土した。

右京第 94 次　(14)

長岡京市教育委員会

長岡京期の南北２間，東西２間以上の掘立柱建物跡２棟や柵列などを検出した。



昭和57年度　調査地位置図

長岡京跡調査地一覧表

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第116次	7AN15H	向日市鶏冠井町山畑20-2	向日市教委	57. 5.17～ 11.16
2	宮内第119次	7AN16C	向日市寺戸町南垣内	(財)京都府埋	3. 4～ 5.20
3	宮内第120次	7AN12C	向日市寺戸町東ノ段	向日市教委	4.23～ 5.13
4	宮内第121次	7AN20B	向日市上植野町馬立地内	〃	6.25～ 6.29
5	宮内第122次	7AN10J	向日市鶏冠井町稲葉25-14	〃	6.29～ 7. 1
6	宮内第123次	7AN7F	向日市寺戸東野辺	(財)京都府埋	7.10～ 9.15
7	宮内第124次	7AN9K	向日市鶏冠井町大極殿地内	向日市教委	7.28～ 7.30
8	宮内第125次	7AN3B	向日市森本町前田	(財)京都府埋	7.29～ 9.21
9	宮内第126次	7AN11F	向日市寺戸町南垣内57-2	向日市教委	9.27～ 10. 4
10	宮内第127次	7AN15E-7	向日市上植野町南開	〃	12. 6～ 12.21
11	宮内第128次	7AN10K	〃	〃	58. 1.17～ 2.15
12	宮内第129次	7AN15I	向日市鶏冠井町山畑地内	〃	1.24～ 1.25
13	宮内第130次	7AN10G-2	向日市上植野町南開	〃	1.21～ 3.22
14	右京第94次	7ANQUD	長岡京市久貝2丁目	長岡京市教委	57. 4.16～ 5.29
15	右京第95次	7ANNHR	長岡京市友岡1丁目	〃	5.18～ 6.22
16	右京第96次	7ANKUT-4	長岡京市開田3丁目	〃	5.10～ 6.30
17	右京第97次	7ANSDK	大山崎町円明寺小字大門脇	大山崎町教委	4.14～ 4.16 10.15～ 10.23
18	右京第98次	7ANGSW	長岡京市井ノ内坂川14-1	(財)長岡京市埋	5.21～ 6. 1
19	右京第99次	7ANKKI	長岡京市神足3丁目304	長岡京市教委	5.26
20	右京第101次	7ANIKE	長岡京市長岡3丁目	(財)長岡京市埋	6.15～ 7.12
21	右京第102次	7ANMMK	長岡京市神足3丁目	長岡京市教委	6.16～ 7. 5
22	右京第103次	7ANKTN-2	長岡京市開田3丁目	〃	6.26～ 7.28
23	右京第104次	7ANOND	長岡京市下海印寺西山田	(財)長岡京市埋	7. 2～58. 1. 6
24	右京第105次	7ANINC-2 IMK	長岡京市今里西ノ口・舞塚	(財)京都府埋	7.12～58. 1.26
25	右京第106次	7ANKHT	長岡京市開田4丁目	(財)長岡京市埋	7.26～ 9. 2
26	右京第107次	7ANGNC	長岡京市井ノ内西ノ口	(財)京都府埋	7.20～ 10. 2
27	右京第108次	7ANCKM	向日町北山65	向日市教委	7.27～ 8.13
28	右京第109次	7ANKNZ	長岡京市天神1丁目8	(財)長岡京市埋	8.10～ 9. 3
29	右京第110次	7ANIST-4	長岡京市今里2丁目	(財)京都府埋	8. 4～ 9.20
30	右京第111次	7ANMSI-2	長岡京市開田4丁目	(財)長岡京市埋	9. 7～ 10. 5

	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
31	右京第112次	7ANGSW-2	長岡京市井ノ内坂川27-1	(財)長岡京市埋	57. 9.21～ 10. 7
32	右京第113次	7ANSTE-2	大山崎町円明寺小字鳥居前	大山崎町教委	10.25～ 10.30
33	右京第114次	7ANKTR	長岡京市開田3丁目138	(財)長岡京市埋	10.18～ 11. 9
34	右京第115次	7ANTSE	大山崎町下植野小字山王前	大山崎町教委	11.15～ 11.27
35	右京第116次	7ANTMK	大山崎町下植野小字宮脇	〃	12. 4～ 12.24
36	右京第117次	7ANISB-2	長岡京市今里三ノ坪	(財)長岡京市埋	11.15～58. 1.10
37	右京第118次	7ANNNM	長岡京市友岡西山16-1	〃	12. 3～ 12.21
38	右京第119次	7ANKSN-2	長岡京市長岡2丁目434-1	長岡京市教委	58. 1. 5～ 3.10
39	右京第120次	7ANNKG-2	長岡京市友岡3丁目	(財)長岡京市埋	1. 6～ 1.22
40	右京第121次	7ANQNK	長岡京市久貝2丁目	〃	1.10～ 2. 5
41	右京第122次	7ANGNU	長岡京市西ノ京	〃	1.24～ 2. 3
42	右京第123次	7ANGSW-3	長岡京市井ノ内坂川9-1	〃	1.26～ 2. 1
43	右京第124次	7ANSYE	大山崎町円明寺小字薬師前	大山崎町教委	2. 4～ 2.19
44	右京第125次	7ANPHI	長岡京市天神4丁目3-22	(財)長岡京市埋	2. 4～ 2.16
45	右京第126次	7ANQUD-2	長岡京市久貝2丁目	〃	2.24～ 3.12
46	右京第127次	7ANOSG STE-4	長岡京市下海印寺西明寺 大山崎町円明寺小字鳥居前	(財)京都府埋	3.18～
47	右京第128次	7ANNHR	長岡京市友岡一丁目	(財)長岡京市埋	3.22～
48	左京第87次	7ANMTG-3	長岡京市神足棚次・橋本	長岡京市教委 (財)長岡京市埋	57. 4.16～ 5.17 9.29～ 11.10
49	左京第88次	7ANFOT-6	向日市上植野町大田	向日市教委	4.19～ 5.10
50	左京第89次	7ANEJT-2	向日市上植野町十相	〃	5.10～ 7.27
51	左京第90次	7ANFTB-2	向日市鶏冠井町十ケ坪5	〃	5.24～ 6.11
52	左京第91次	7ANWNT	京都市伏見区久我	(財)京都市埋	4.15～ 9.30
53	左京第92次	7ANXCD	京都市伏見区羽束師菱川町	〃	9.20～58. 1. 5
54	左京第93次	7ANXNR XHD	〃	〃	10. 1～
55	左京第94次	7ANFOT-7	向日市上植野町大田	向日市教委	10.14～ 11.21
56	左京第95次	7ANESH-5	向日市鶏冠井町沢ノ東	〃	10.16～ 10.24
57	左京第96次	7ANQNR-2	長岡京市勝竜寺西川原田	(財)長岡京市埋	11.15～ 11.30
58	左京第97次	7ANFHM-3	向日市上植野町樋瓜	向日市教委	12.10～58. 1.22
59	左京第98次	7ANFNT-3	向日市上植野町西大田	(財)京都府埋	12.23～58. 3.14
60	左京第99次	7ANXMG	京都市伏見区羽束師菱川町	(財)京都市埋	58. 1.20～ 2.23

右京第 96 次　(16)　長岡京市教育委員会

長岡京の五条大路の南北両側溝と，南側溝の南側で建物跡と考えられる柱穴列を4間分検出した。また，検出した両側溝の距離は，溝心々間で約 15m を測る。

右京第 102 次　(21)　長岡京市教育委員会

長岡京期の溝2本（S D10201，S D10202）を検出した。S D 10201からは，「自司進□」，「三年十二□□」と書かれた木簡や，人形，櫛，ワラジや「一」と墨書された土師器椀などが出土した。

右京第 104 次　(23)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，丘陵と河岸段丘に分かれ，丘陵では土壙と土壙墓を各1基ずつ検出した。段丘は水田，畑地になっていたが，長岡京期の小泉川の旧河道や古墳時代の溝などを検出した。特に，長岡京期の旧河道からは土馬，墨書人面土器，ミニチュアカマドなどが多量に出土した。

右京第 105 次　(24)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は，北方部の今里西ノ口地区と南方部の今里舞塚地区の2地区に分かれる。北方部の今里西ノ口地区では，長岡京期の掘立柱建物跡2棟と，奈良時代の東西溝，中世の井戸や溝，柱穴群を検出した。南方部の今里舞塚地区では，舞塚古墳の後円部及び前方部周濠の一部を検出し，後円部に土橋を持つことを確認し，墳形が帆立貝式であることが判明した。周濠内からは，人物埴輪の頭部と多量の円筒埴輪片が出土した。また他に，長岡京期の南北溝や弥生時代の溝を検出した。（本誌参照）

右京第 106 次　(25)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

方墳の周濠の一部を検出した。周濠の幅は約 4m を測り，周濠内からは円筒埴輪の他に楯型や衣笠形の埴輪も出土している。規模は昭和56年の民家の建て替え工事における立会調査で検出した周濠とから考えると，1辺 30m 前後になる。

右京第 107 次　(26)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

中世の溝，土壙，柱穴の他に古墳時代の土壙墓を検出した。土壙墓内からは須恵器の杯身・杯蓋・短頸壺，金環が出土した。

（本誌第６号参照）

右京第108次　(27)　向日市教育委員会

弥生時代のピットや土壙を検出し，弥生式土器や石器が出土した。

右京第110次　(29)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

三条条間小路の北側溝を検出した。他に，弥生式土器片を若干含む自然流路を検出した。（本誌第６号参照）

右京第111次　(30)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の井戸，土壙の他に古墳～奈良時代の土壙，中世の井戸，土壙等を検出した。長岡京期の井戸は木組みで，木ワクが一段残っていた。

右京第112次　(31)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

中世の住穴群と土壙墓，古墳時代の溝，土壙，弥生時代の円形の竪穴式住居跡を検出した。

右京第119次　(38)　長岡京市教育委員会

奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡７棟，柵列４本，奈良時代の溝等を検出した。奈良時代の建物跡の中には，３間×３間の総柱の建物跡が２棟あり，規模はそれぞれ5.2m×4.2m，4.8m×4.3mを測る大きなものである。

右京第121次　(40)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，西一坊大路と八条第１小路の想定地であるが，道路側溝は検出されず，かわって長岡京期の掘立柱建物跡や柵列等を検出した。柵列は，２時期にわたる建て替えが認められる。

右京第126次　(45)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

西一坊第２小路の側溝と考えられる長岡京期の南北溝を検出した。溝内からは，長岡京期の須恵器，土師器等の他，和銅開珎が１点出土した。

左京第87次　(48)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

東二坊大路の東西両側溝を検出した。西側溝は，幅約2.4m，深さ約0.5m，東側溝は，幅約1.5m，深さ0.3mをそれぞれ測る。両側溝からは，墨書人面土器，土馬，土師器，須恵器，和銅開珎，神功開宝，万年通宝，櫛，獣骨などが出土した。両側溝間の距離

は約21m を測る。

左京第 88 次　(49)　向日市教育委員会

三条大路の北側溝かと推定される長岡京期の東西溝を検出した。

左京第 89 次　(50)　向日市教育委員会

東二坊大路推定東側溝と南一条条間大路南側溝を検出した。溝中からは長岡京期の土師器，須恵器とともに墨書土器，墨書人面土器，人形，木簡等が出土している。

左京第 91 次　(52)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

長岡京跡推定地は，中世の湿地状堆積がみられ検出されなかったが，調査地東部及び南東部で，12世紀から14世紀の遺構群を検出した。

左京第 92 次　(53)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

三条大路及び三条第２小路の南北両側溝を検出した。その他，長岡京期遺構面の下層で弥生時代の土壙やピット，溝等を検出している。

左京第 93 次　(54)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

長岡京期，平安時代の建物跡や溝，古墳時代から奈良時代の水田跡を検出している。

左京第 98 次　(59)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

向陽高校の武道館建設に伴う調査で，調査地は現向陽高校体育館の北側で，長岡京の三条第２小路接地に当る。今回の調査では，長岡京期の掘立柱建物跡２棟と，他に奈良時代のしがらみや，中世の井戸等を検出した。掘立柱建物は東西３間，南北１間以上の東西棟のものと，南北５間以上，東西２間以上の南北棟のものである。また，「□□□人」や，「大□」，「吉」，「長」等と記された墨書土器が出土している。

左京第 99 次　(60)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

東三坊大路の東西両側溝と思われる溝を検出した他，長岡京期の建物跡，柵列や古墳時代の河川などが検出された。

(山口　博)

センターの動向

1. できごと（57.12～58. 3）

12. 4　法成寺跡（京都市上京区）第1次発掘調査終了11. 2～

古殿遺跡（峰山町）発掘調査終了7. 5～

12. 6　山田館跡（福知山市，近畿自動車道舞鶴線内）発掘調査開始～58. 3. 30

12. 8　中山城跡（舞鶴市）発掘調査開始～58. 3. 31

後正寺古墓・小屋ケ谷古墳（福知山市，近畿自動車道舞鶴線内）発掘調査終了6. 26～

長岡京跡（長岡京市，都市計画道路石見・淀線内）発掘調査関係者説明会実施

12. 10　第5回役員会及び理事会開催

—於パレスサイドホテル—

福山敏男理事長，樋口隆康副理事長，岸　俊男，川上　貢，足利健亮，中沢圭二，佐原　真，原口正三，井上裕雄，東条　寿各理事，栗栖幸雄常務理事，前尾有人監事出席

12. 17　医王谷古墳（亀岡市，老ノ坂バイパス内）現地説明会実施，約70名参加

12. 22　城ノ尾館跡（福知山市，近畿自動車道舞鶴線内）発掘調査開始～58. 3. 29

12. 25　亀岡条里制跡（亀岡市，亀岡バイパス内）発掘調査終了5. 4～

12. 27　篠・石原畑窯跡群（亀岡市，老ノ坂バイパス内）発掘調査終了5. 17～

12. 23　長岡京跡左京第98次（向日市）発掘調査開始～58. 3. 14

1. 13　伏見城跡（京都市伏見区）発掘調査開始～2. 28

1. 18　北金岐遺跡（亀岡市，亀岡バイパス内）発掘調査開始～3. 26

1. 20　長岡京跡（長岡京市・大山崎町）立会調査開始～3. 30

1. 21～2. 1　奈良国立文化財研究所主催昭和57年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「墳墓課程」参加（辻本主任調査員）

1. 22　長岡京跡右京第105次調査（長岡京市，都市計画道路石見・淀線内）関係者説明会実施

1. 25　同上発掘調査終了57. 7. 12～

1. 25～26　奈良国立文化財研究所主催「条里制研究会」出席（村尾調査員）

1. 26　長岡京跡連絡協議会開催

2. 7　医王谷窯跡（亀岡市，老ノ坂バイパス内）発掘調査開始～3. 30

2. 10　医王谷古墳（亀岡市，老ノ坂バイパス内）発掘調査終了57. 10. 4～

2. 23　長岡京跡連絡協議会開催

2. 25　伏見城跡（京都市伏見区）関係者説明会実施

3. 1　ケシケ谷館跡（福知山市，近畿自動道舞鶴線内）試掘調査開始～3. 31

3. 7　長岡京跡左京第98次（向日市）関係

者説明会実施

3. 10　法成寺跡（京都市上京区）第2次発掘調査開始～3. 22

3. 18　長岡京跡右京第127次調査（長岡京市・大山崎町）開始

3. 30　第6回役員会及び理事会開催
　　―於パレスサイドホテル―
福山敏男理事長，岸　俊男，藤井　学，川上　貢，原口正三，藤田价浩，城戸秀夫，東条　寿各理事，栗栖幸雄常務理事，前尾有人監事出席

2.　普及啓発事業（57. 12～58. 3）

1. 8～9　第13回埋蔵文化財研究会（代表高倉洋彰氏）に協力し，京都府立勤労会館で『古代・中世の墳墓について』をテーマに，同研究会の開催・運営を担当する。

2. 19　第12回研修会　―於京都社会福祉会館―開催（発表者及び題名）磯野浩光「山城の古代寺院跡と古道」，樋口隆久「丹波国分寺の調査」，大槻真純「和久寺廃寺の発掘調査」参加者69名

3. 20　第13回研修会　―於京都府立婦人教育会館（長岡京市）―開催（発表者及び題名）山中　章，中尾秀正，長宗繁一，山口　博「昭和57年度長岡京跡関係遺跡の発掘調査」，（記念講演）中山修一「長岡京遷都1200年を迎えるにあたって」参加者61名

受 贈 図 書 一 覧 (57.12〜58.2)

岩手県立埋蔵文化財センター	第5回埋蔵文化財展 御所湖の縄文時代
(財)いわき市教育文化事業団	内宿遺跡，竹之内遺跡
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	群馬県埋蔵文化財調査事業団 年報1
石川県立埋蔵文化財センター	七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡，能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ，石川県金沢市今町A遺跡，漆町遺跡，高堂遺跡，石川県立埋蔵文化財センター年報 第1号，同第2号
三重県斎宮跡調査事務所	史跡 斎宮跡
(財)大阪文化財センター	大阪文化誌 第15号
(財)元興寺文化財研究所	出土遺物・民俗文化財へのX線透過試験の応用
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報 1982，奈良国立文化財研究所三十年史
宮崎県埋蔵文化財センター	宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅰ），同（Ⅱ）
山形県教育委員会	山形県埋蔵文化財調査報告書 第51集〜第61集
米沢市教育委員会	米沢市万世町桑山団地造成地内埋蔵文化財調査報告書 第Ⅰ集
福島県教育委員会	関和久遺跡Ⅸ，同Ⅹ
川崎市教育委員会	川崎市文化財調査集録 第18集
滋賀県教育委員会	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ-2，国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書
柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1981年度
奈良市教育委員会	奈良市発掘調査測量用基準点 成果表・点の記
玉野市教育委員会	沖須賀遺跡
大分市教育委員会	多武尾遺跡調査概報
大船渡市立博物館	大船渡 その海と大地
出光美術館	出光美術館 館報第40号
福井県立若狭歴史民俗資料館	特別展 若狭の仏教絵画
名古屋市見晴台考古資料館	特別展 なごやの古墳と見晴台遺跡
尼崎市立田能資料館	田能遺跡発掘調査報告書

豊岡市郷土資料館	亀ケ崎遺跡群，北浦古墳群
(財)倉敷考古館	倉敷考古館研究集報 第17号
徳島県博物館	徳島県博物館紀要 第13集
東京大学文学部考古学研究室	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第1号
早稲田大学図書館	古代 第72号
国學院大學考古学資料館	国學院大學考古學資料館要覧 1982
大阪市立大学考古学研究会	史峯 第6号
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第16号
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第9冊， 京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書
大山崎町教育委員会	大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第2集
久美浜町教育委員会	明治大正年代の布袋野の姿
京都大学考古学研究会	トレンチ 34
城南郷土史研究会	やましろ 第15号
(財)古代學協会	古代文化 第287号～第289号
福知山史談会	史談 ふくち山
安　田　博　幸	巨摩廃寺遺跡出土遺物にみられる赤色顔料物質と人骨に付着した赤色顔料物質の化学分析（抜刷），古代赤色顔料と漆喰の材料科学（抜刷）
岡　本　正太郎	五條古代文化 第24号，古代文化を考える 第8号
前　田　洋　子	考古展 古代日本の再見，大阪市立博物館報 No. 21， 大阪市立博物館研究紀要 第9冊，同第12冊～第14冊
山　口　辰　一	武蔵国府の調査XV
山　田　邦　和	須恵器・その地域性（抜刷）
中　村　信　幸	半田のお寺

――編集後記――

第7号をお届けします。

冒頭の石井論文は，緑釉陶器・ロストル型式の窯などで有名な亀岡市篠窯跡群の須恵器の編年作業に本格的に取り組んだ意欲的なものです。また，今回，初めて発掘調査が行われ重要な遺構が検出された福知山市の和久寺跡について，市教育委員会の大槻氏に報告していただきました。双方とも今後の発掘調査・整理作業の結果が大いに注目されるところです。

ところで，15頁に掲載されている『古代・中世の墳墓について』という冊子は，去る1月8・9日，京都で開催された第13回埋蔵文化財研究会の資料で，西日本各地の古代・中世の墳墓の資料が網羅された画期的なものです。ぜひ，御一見下さい。

（編集担当　田中　彰）

京都府埋蔵文化財情報 第7号

昭和58年3月31日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
TEL (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）